

同志社女学校への来校者——明治—大正期——

宮 澤 正 典

はじめに

学校が地域と密接にかかわる存在は絆と言ってよい。二〇一一年三月の東日本大震災でも痛感させられた。私立学校は公立学校とはその関わり方が異なるとしても小学校から大学まで地域と無関係である筈はない。

私立同志社女学校の地域との関わりはどうだったのだろうか。明治初期の京都においてキリスト教主義を建学理念とする同志社はその時代、地域と相容れないものがあった。とくに京都府の対処は否定的な疑念と反感、そして攻撃的でさえあった。一種異物として疎外待遇がなされた側面は無視できない。地域学校となり難い条件があった。

一八九四（明治二七）年一月創刊の『同志社女学校期報』は巻頭で「每期一回発刊し一には校内の事変を報告して之に対する同情を養ひ一には各自の消息を交換して其親睦を全ふするものなり」とうたっている。その「校内の事変」を遡ってみると一八七五（明治八）年同志社創設前後の京都府との関係は十年を経て多少の緩和はあっても決して解消して地域学校化したわけではなかった。その反面、地域を超えた理念を共有する絆が

うかがえる。キリスト教伝道が進められた地方、さらには国内を超えて国際的な関わりに及んでいた。同志社女学校への来校者を通して観ることが出来る。

本稿では『同志社女学校期報』第二号（明治二十七年六月）から第五二号（昭和二年一月）に拠って女学校来校者を拾って同志社女学校のひとつの姿を探ってみたい。なおこの三十余年の間に編集人、実務担当者も交替しており、来訪者の記録にも粗密の差異のあることは否めない。また厳密には来校者とはいえない同志社公会堂（チャペル）、神学館（クラーク記念館）での講演者の多くも拾った。「男女学生の為めに演説あり」、「男女学生悉く列席す」などと付記されており女学校生徒が出席していたからである。男女学校合わせても、一堂に収容しうる規模の学園であった。女学校に限っても「朝拝後」に「一場」のみならず、「二時間」にも及ぶ講演をしばしば組むことが出来たのも全校数十名の生徒数だったからであると思われる。

一、同志社への京都市の対処

創設期同志社への京都市の否定的な立場について先に触れたが、いまその二、三の例を挙げてみる。まず明治一〇（一八七七）年同志社の「外国人備入」に関して府監察掛は「内部怪ムヘキアルヲ以テ」探索をしている。そして「嗚呼新島襄ノ陰謀ヤ己レ皇国ニ生レナカラ外国人股肱トナリ国ヲ売ルノ所業ヲナス自己一身ノ上ニ止マス漸次多数ノ男女子ヲ誘ヒ外人ノ恩ヲ蒙ラシメ忘国ノ不民ヲ蕃殖セシメント謀ル慨歎ノ至ニ堪ヘス」と報告した。翌年にも「該社ニ於テ頻ニ耶蘇聖教授之趣相聞候際新島襄山本覚馬ヨリ社校内ニテ聖教授為致問敷旨誓詞差出候其後モ引続陰ニ教授致シ生徒等ヲモ各所ニ派遣シ伝教為致候由ニ付始終挙動注目罷在候」と

述べる。さらに巨額の財産をもつてした土地購入、家屋建築その他の費用に関して「全クデビス等之教会ヨリ之出金カト被相考其他之費用渾テ之ヲ米国教会ニ仰キ候事ト被爲察候」。「若シ之ヲ陽ニ外国へ売渡ノ筋ニ無之トテ不問ニ措クトキハ遂ニ蚕食之底止不可凶儀ニ付只管苦慮罷在候²⁾」と報告していた。

明治一三年にはさらに露骨に「扱新島襄婦朝之頃ハ只一介之書生ニ有之結社人山本覚馬ニライテモ無財産ノ貧士族而者何ソ大金ノ貯藏アル謂レ無之然ルニ明治八年該社設立以來今日迄ノ経費ヲ予算スルニ別紙之通万以上大金額ナリ斯ノ如キ大金ヲ探出スヤ化幣偽造ヲナシタルカ將盜金ナシタルカ」とまで言つたうえ、それが米國耶穌社の出金によるもので「彼等耶穌会社ノ奴隸トナリ 皇國ノ土地ヲシテ外国人ノ有トナサシム耶穌教ノアルヲ知テ 皇國アルヲ知ラサル也国賊モ亦甚シ¹⁾」い。ついでには「向後新島山本等陰ニ出金スルモノハ假令陽ニ条理アルモ買得御許可無之様致度此段申上候」と提議し、さらに「皇國ノ大切ヲ忘レ新島カ如キ不忠不義ノ売國者世界トナランコトヲ恐懼歎息スト風聞類ニ相聞候³⁾」と結んでゐる。これと同種の見解は「外国人傭入」申請毎に繰り返されてゐた。

女学校に関しては最初の教師 A・J・スタークウエザー雇入は認可されていたが、明治一〇（一八七七）年一二月に H・F・パーミリー、J・ウィルソン雇入を新島と山本が連名で願ひ出たが府は政府との間に介在して、外務省からの書類手續不備を表の理由として差し戻してゐる。翌年一月に再度願ひ出たが三月に不許可と下達されている。新島は上京も含め雇入のため奔走したが京都僑居免状は足かけ四年かけてようやく明治一三年六月に許可されたのであつた。

同志社女学校は明治一〇年四月「同志社分校女紅場」として開業した。それを同年九月には「新島襄女学校ト改称いたし度段同人より届出候二付⁴⁾」として僅か半年足らずで改称してゐる。府学務課への「勸業課上申」が

影響したと考えられる。それは「女紅」と「女学」の相異を言い、新島襄設置女紅場規則の学課目を見れば「学識ノミヲ有シテ目今浮業ナル芸妓輩或良民ノ子女職業従事ノ念慮ヲ薄」めさせるものであり「新島設置ノ如キ女紅場ノ名称ヲ転シ女学校ト可改正学務課江詮議被申付度此段上申仕候也」としていた。とくに「(附箋) 女学女紅ノ名称論位ノ格別有害ナシト雖トモ毛唐人ノ恩ヲ受ケ新嶋ノ如キ往々国ヲ売ルノ不民ヲ蕃殖スルヲ小官等ハ第一番ニ歎息スル也」⁽⁵⁾は地域京都が同志社と相容れ難い関係を物語る。

同志社英学校、女学校への府の「同志社視察之記」(明治一二年五月二八日) 明治一六年六月二七日⁽⁶⁾は、一面虚心の監察(とくに女学校)がなされていて当時の同志社の状況を知りうるが、ここまで紹介した府の同志社観に立ってなされていたのは確かである。

二、同志社女学校入学生

既述の条件のもとでの同志社女学校入学者数・出身地を『同志社女学校期報』第一号に拠って掲げてみる。表1によって入退学、卒業数を見ると当時の厳しい状況をうかがうことができる。出身地は、卒業生については同誌の「卒業生姓名」一覧に併記されており、第2表化したように、その地域学校性の薄い傾向は退学者にも共通すると考えられる。表1と2の明治一五年、二二年の卒業生数に誤差があるが『期報』に拠った。表3の明治二七年(一八九四)年現在の在学生七八名の出身府県を見ても京都府と他府県出身者との比率は卒業生の出身府県とほとんど同率であった。京都の場合でも市内とは限らず府下出身者も相当含まれる。

このことは寄宿舎学校ではないまでも寄宿舎を欠く女学校の存立は不可能であった。明治期の同志社女学校

表1 同志社女学校創業以来生徒員数表

明治	9	10	11	12	13	14	15	16	17
入学	9	13	13	19	14	10	25	12	10
退学		5	5	7	11	5	9	12	10
卒業							3	2	3
年末現在	9	17	25	37	40	45	58	56	53
明治	18	19	20	21	22	23	24	25	計
入学	3	46	89	63	127	8	20	31	512
退学	7	14	19	44	97	73	38	25	381
卒業		2	4	6	4		5	24	53
年末現在	49	79	145	160	186	121	96	79	—

規則、校則を辿ってみても、その中で「舎則」の占める割合が「校則」と並んで重視されていた。一例を挙げると明治一六（一八八三）年七月の「同志社女学校規則」では規則が二六条に対して舎則が一九条に及んでいる。さらに「通学生止宿所ハ凡テ当市内ニ於テ其最近親族（父母、兄弟、叔伯父母）若クハ本校ノ認可ヲ得タル家ヨリスルヲ要」した。その意味でも寄宿舎は重要な意味を持ち、本稿主題の来校者を迎えるにも寄宿舎がその役割を担ったことはその都度指摘できる。

明治一一（一八七八）年に建てられた女学校最初の校舎はウーマンズ・ボードがアメリカ独立記念募金によっており、国際的絆をあらわしていた。校舎は同時に寄宿舎を兼ねており、一階のかんりのスペースが教師寄宿舎であり、来校者の宿泊にも充てられた。ちなみにイザベラ・ボードは建築間もない明治一一年にここ（二条さん屋敷）に二週間滞在して「アメリカ式の女子ミッシオン・スクール（同志社女学校）」校舎の様子を紹介している。何度か京都カレッジ（同志社英学校）の授業参観をし、新島邸も訪問していた。⁽⁸⁾校舎建築のみならず、経済面での国際的支援は繰り返かえしなされてきたが、絆を物語るものとして『同志社女学校期報』第一号の次の記述

表2 同志社女学校卒業生（第1回～第10回）出身地

明治	15	16	17	19	20	21	22	23	24	25	計
青森								1			1
岩手			1								1
群馬									1		1
東京										1	1
新潟	1					2					3
長野						1					1
石川										1	1
福井								1	1	1	3
愛知									1	1	2
滋賀	1		2	2	2		1		1	1	10
三重									1		1
奈良							1			2	3
和歌山									1		1
京都	1	1				2	1	3	6	4	18
大阪	2	1									3
兵庫							1		2		3
岡山									1	1	2
鳥取					1	1			1	1	4
山口								1	2		3
愛媛									1		1
高知										1	1
福岡									1		1
熊本					1		1		2		4
宮崎									1		1
計	5	2	3	2	4	6	5	6	23	14	70

(『同志社女学校期報』第1号により作成)
明治18年には卒業生なし

表3 明治27年在学生出身地

秋田	3	大阪	5
宮城	1	兵庫	3
山形	1	和歌山	1
福島	1	岡山	1
群馬	3	広島	1
東京	2	鳥取	2
岐阜	3	山口	2
福井	4	徳島	1
愛知	3	愛媛	7
三重	2	高知	1
奈良	2	福岡	2
滋賀	5	熊本	3
京都	18	宮崎	1

ととす本校廿五年度（明治廿五年四月—廿六年三月）の経済は百〇九円五十四銭一厘の不足を告げたり然るに此百弗即日本銀貨に改算して百四十八円十五銭の寄附ありしを以て多少の剰余を生ずるに到れり此寄附を周旋せられし本校前女教師ホワイト氏にて我等両氏に対して厚く謝意を表せざるを得ざるなり」。

以上のように京都市に在りながら地域を超えた、ある意味で理念を共有する国内外の絆を来校者を通して見てみたい。

を一例として挙げる。

「本校が奨学金を得たるは実に昨年十月廿八日北米合衆国ニューヨーク府医学博士ツウイング氏の毎年四十九円五十銭寄附の約ありしを以て権輿とす次いで本年一月十七日合衆国マサチューセツ州ビチフィールド、キヤムプベル嬢姉妹は又同じ目的を以て四十九円五十銭を惠送せられたり我等大に其厚意を鳴謝せざるを得ず此他在長州長府のブラオン及本校教師マイヤ氏の両氏は煖室爐購入費として六円を寄附せられぬ又特に感謝すべきは北米合衆国ニューハムプシア州ハノボル府リーズ夫人百弗寄附のこ

三、明治二十七年―四五年の来校者

明治二十七年一月一日発刊の『同志社女学校期報』第一号では前年の来校者を項目を立てて掲げていないが、坪内雄藏（早稲田文学記者）「女子と文学」および藏原惟郭（熊本女学校長）「女子教育の方針」を「論説」でその要旨を紹介して「先月坪内君の同志社講義会の聘に応じて来京せられし際特に女学校に聘して一場の演説を請ひ、および「藏原君の特に女学校の為一夕演ぜられたる演説なり」と注記している。本稿では第二号（明治二十七年六月六日発刊）以下の来校参観来訪来賓などの項を中心に辿ることにする。しかし採録には著しく精粗があり、来校者全てが記録されているわけではないだろうこと、また日付順に記載されているとは限らず、各項から拾って配列を試みたことを断っておきたい。

〈明治二七（二八九四）年〉

1月―5月参観来観。河原校長（京都高等女学校）。（以下「高等女学校」は「高女」と略記）。二宮校長（松山女学校）、藏原校長（熊本女学校）、望月校長（山陽女学校）、井伊校長（鳥取女学校）、成瀬校長（梅花女学校）、三枝校長（清流女学校）、磯貝教頭（金城女学校）、水蘆校長（金沢女学校）、伊藤教諭（大阪府高女）、楠美教諭（京都尋常師範学校）の来観ありしは本校の却て荣誉とする所にして殊に右諸氏一場の勧話は大に全校の精神を奨励したり。

5・22 大野久三郎（静岡県常置委員、静岡私立高女に關係）兩三日滞在して仔細に視察せられしが、生徒の

風儀等に於て過分の賛辞を与へられた。

6・28 成瀬仁藏(梅花女学校長)、河原一郎(京都府高女校長)、渡辺常子、宮川敏子(神戸女学院教授)卒業式来賓。成瀬は卒業生への告示。

6・30 宇佐美松次郎、常に本校に同情を寄せらる滑稽談。大沢善助、詠諷演説。ともに同窓総会にて。

9・29 広瀬源三郎「朝鮮事情」近頃朝鮮より帰朝せられたるを聘して。

10・2 深川とし子(大阪市立高女助教諭)来観。

10・4 深川とし子、裁縫の教授を熟覧。

10・10 内藤儀十郎(熊本尚綱女学校長)一場の談話、関東諸女学校視察談。

10・19 河本恂藏(同志社病院ドクトル)本校学芸講話第一回「育児法諸論」、10・26第二回ドクトル佐伯理

一郎「婦人衛生の事」、11・2第三回ドクトル森田久万人「哲学とは何ぞや」、11・10第四回河本恂藏

「繙帯の話」生徒の希望により依頼したるなり。11・17第五回小崎成章(同志社哲学教授)「学生の

心得」。

10・22 井伊松藏(鳥取女学校幹事)来校。

10・26 楠本正隆(衆議院議長)、河嶋醇一(同議員)夜快活なる演説、鈴木重遠(同議員)外一名。

10・28 堀江松華(日本新聞)平壤戦争の話。

10・31 稲垣満次郎「日清事件―戦後の日本国―日本人」なる壮快なる演説を聞きたり。

11・7 宮川経輝、朝会で談話。

11・13 井伊松藏、また来校せられ朝感話。

- 11・16 徳富猪一郎（国民之友記者）「女の心得」につき一時間談話。
- 11・27 淵澤能恵（同窓会員）十年目に来校せられ翌朝感話をせられたり。
- 11・ 秦主馬藏、藤木長太郎（下京高等小学校教師）来観せらる。
- 12・4 和久山きえ子（我校の旧教師にして今は神戸の幼稚園）朝会、懇談会。
- 12・10 阿部家充（国民新聞社通信員）旅順口実見談を聞けり。
- 5・4 フォスター將軍（米国外務大臣）同志社公会堂にて演説あり、会後に同氏一行を当校に招じて茶菓を呈したり。
- 5・6 オーア嬢（フォスター將軍の一行）一場の感話を依頼せしが頗る有益なるものなりき。
- 5・13、16 B・K・エモルソン（アーモスト大学地質学教授）文芸会に列せられる。十六日再訪、本校備付の金石標本に就て談話せられ数個の標品に命名せられ喜んで進呈したる数個の標品を携へ帰られたり。
- 10・16 メーリー・ボルクハム、カーリー・ボルクハム両嬢（北米合衆国新約克府の貴女）は弥阿弥滞在中来訪ありて転築の拳を聞かれ臨時寄附せられたる五十円あり。
- 10・18 テーラー外二名参観。
- 10・19 スタンフォールド、北清の実見談。
- 10・24 リチャード夫人外三名来観ありたり。
- 11・16 ケレー、朝会ナイチンゲールの伝を話さる。
- 12・2 ヘリック嬢「インドの女子教育の事」談話せられたり。生徒より頻りに同地の民情風俗の事につき雑問を發し興愈々多きを加へ時の進むを知らざりき。

・ ベーン夫人、米国匿名の一嬢より金貨十五弗を来校の節金五円を文庫に寄附せられたる厚意も亦忘る、能はざるなり。

〈明治二八（一八九五）年〉

4・ 姉妹校として常に敬愛する諸女学校の中、山陽、清流、梅花、神戸等の教師生徒は数日校内に宿せられたり。殊に梅花女学校よりは四月中旬四十余名一団体を作りて来泊、両校より委員を設け一夕親睦の会を食堂に張り互に余興をも添へ福引などありて樂しげに睦まじみたり。

5・ 9 文芸大会。満座多くは知名の紳士（尾崎行雄氏の如きも来られぬ）会后平岩愼保氏の首唱に應じて「同志社女学校万歳」を高唱せられしは殊に恐縮の至なり。

5・ 初 竹内梅子（東京明治女学校）、田中多計子（大阪）来校。

5・ 26 香川富野子、愛児を携へて大阪より来京当校に一泊せられ同級生の方々と談話。

5・ 27 藤井栄子、ウエンライト教師告別のため一寸来校。

5・ 28 地久節、成瀬（梅花女学校長）祝賀演説、望月（山陽女学校長）地久節祝禱、松本荻江子（神戸伝道学校）陛下への祝禱。

5・ 第六回関西女子教育会。東守（彦根女学校長）等の演説。東は名古屋より西は岡山に至るまで諸女学校男女の教師会せられしもの参聴者を合すれば十五校四十余名、生徒の臨聴せしものも多かりき。

6・ 1 杉山照子、病気の為帰国の途次来校一泊。

6・ 9 岡島鼎子、ウエンライト送別の為来校。

6・ 27 増野悦興、第十二回卒業式演説。

- 6・29 西山教充送別全校集会、湯浅治郎、湯浅吉郎、大島正健、松山高吉、坂田幸三郎、浜玉圓諸氏の短話。
我々は各地の女学校教会等の婦人方の宿泊を引受けしが（毎日十五銭許の実費の支払を請ふて）宿泊者の数已に百の上に出でたり。又通常参観人も其数いと夥しかりき。

6・1 卒業生送別会、チャイルド嬢（米国伝道会社婦人部会計）勧話。折よく来京せられて杉山照子。

〈明治二九（二八九六）年〉

- 11・13、14 坪井正五郎（我邦人類学者の泰斗）両夜に講演ありしが我校も二年級以上は大抵参聴せり。
12・初 モット（万国連合青年会幹事）数番の演説あり満腔の熱情を吐き奨励。

〈明治三〇（二八九七）年〉

- 9・11 西山教充（前教師）台湾巡遊の実見談。
9・16、18 早瀬中尉、日清戦争実歴談。
9・21 田口卯吉、財政談。
9・25 岩村秀太郎、台湾に関して実地の観察。
10・31 由利公正子爵、五ヶ条の御誓文に関する歴史談。
12・9 上田秀（維新の際長州勢監軍として奥羽に転戦）実歴談。
12・22 中実（箱館起業院主）起業院創立の顛末。

〈明治三一（二八九八）年〉

- 5・初 徳弘時聾、一夕来校教員生徒に一絃琴の効用につき縷述。生徒の内練習を志望する者十名許起りて
毎週火金の午後三時より教授あり習ひ終りたり。

5・ 加集朝陽園主、一夕招じて園芸に関する講話。

5・ 18 パリッシユ嬢、美山氏を伴ふて朝来校、禁酒講話。

〔来訪の同窓会員〕七月浜田知亀子、半田多喜子一泊、九月高木久子朝鮮より帰朝して数日を校内に、一二月三輪栄子神戸より、一二月土倉政子大和より、橋本喜美子、松田幸子投宿して洋行の別辞、長野久子帰朝して久振りに、夏デントン嬢、秋ウエンライト嬢。

〔明治三二（一八九九）年〕

1・ 27 松村介石、三日間夕講演「活機論」二回、「日本の内外」。

3・ 3 石井院長、夕、孤児院幻灯会、院の歴史、功德。

4・ 21 村山令藏、女学校記念式に近時支那台湾より帰朝せられその見聞。

大隈伯の演説ありて同志社公会堂に赴きたり。

7・ 7 成瀬仁藏（女子大学設立発起者）第十六回卒業式の演説。

12・ 11 梅花女学校生の来泊。三宅校長本年卒業の生徒数名引率、当夜は校庭にて村上教師望遠鏡を觀望せしめて星学を講じ、翌朝は同志社理科学校、午後我校普通科四年生を合はせ松浦教頭名勝古跡を案内。

6・ 30 キレー嬢、前教師ベネデクト嬢の紹介にて婦人衛生講話。卒業式にも臨まれその光景を撮影。

10・ 18 ラッド夫人（米国エール大学哲学教授夫人）公会堂にて貧児救育事業の模様談話、宮川敏子先生通訳。談後当校にも立寄らる。

〔明治三三（一九〇〇）年〕

2・ 23 森田教授一周紀念会。油谷次郎七、清水泰次郎演説。

- 4・30 本田庸一、演説同志社公会堂。
- 5・ 村田教師（前々々の日曜）、油谷牧師（前々日曜、前日曜）舎内伝道、五月二十四日晚餐式。
- 7・1 油谷次郎七（四条教会牧師）卒業生一同の懇望に応じて説教。
- 7・3 卒業式、高崎明府属官を伴ふて臨場、大島（奈良中学校長）の勧告は女子教育に宗教的訓練の必要なるを述べられ大に我党の主義に同情を寄せられたれば卒業生を始め一同いと満足したり。
- 9・27 当校にて同志社教員送迎会（送パースレット、同夫人、迎アレキサンダー、ロンバード、太田寛三、ラーネッド嬢、岡島鼎嬢）。終に茂山社中の狂言萩大名腰折あり。
- 10・16 笹尾久米太郎、新婦朝演説、同志社公会堂。
- 10・22 海老名弾正、演説、同志社公会堂。
- 10・28 村田勤、当校に聘して一場の精神的演説。
- 11・17 故大西祝博士追悼会、木下（京大総長）、井上（京大教授）、徳富蘇峰。
- 11・29 同志社創立二十五年記念会、大沢善助府会議長。
- 12・ 文芸会、湯浅吉郎朗読、村田勤滑稽演説、大沢善助感話。
- 2・ 劉応宗、説教（パトリリッチ英訳、大藤重訳）。
- 5・ バック、講話、デビス通訳。
- 秋 宇エンライト嬢、一寸来校快く生徒の為に唱歌練習など。
- 11・16 レーノルド嬢（万国婦人青年会書記）、足利教師通訳。

〔明治三四（一九〇一）年〕

1・ 始業式の午後、同志社公会堂にて片岡衆議院議長演説。

1・ 16 本田庸一、万国学生青年会大会の報告的演説。

3・ 21 神戸女学院と梅花女学校の姉妹たち十余名打ちつれて我が女学校に来られし、ハリス理科学校の望遠鏡を見んとて也。神戸の姉妹は一夜、大阪のは二夜をいづれも故郷の家に帰りたらん心地せりと喜びて過ごされにき。

4・ 19 松村介石、同志社公会堂にて講演「現今必須の人物」。

4・ 23 奥村五百子（愛国婦人会の主唱者）本校大教場にて軍人の寡婦孤児救恤の必要より愛国婦人会組織の主意。

5・ 6 海老名弾正、演説「新武士道」。

5・ 7 尾崎行雄、午後八時同志社公会堂、北清経営談。

11・ 22 郡司大尉、午前九時同志社公会堂、千島談。

11・ 22 高野重三、郡司大尉演説ありし二十二日に家族と共に来校参観。

11・ 26 丹羽清二郎、日本の青年会を代表して上海へ。午後三時、視察談。

12・ 21 閉校式兼クリスマス文芸会来賓、湯淺教師、鈴木鼓村（紙腔琴）其門弟貞方みよ子嬢（琴）。

（会員来往）浜田ちき子（夏期休業中本校に銷夏）、中村久栄子（卒業式臨席に態々来京）、堀見、鐫木（夏期

学校中滞在）、河村雪子（東京より帰省の途次）、坂田咲子、小川安子（東上の途次）、小栗里子（十日寄宿舍に起臥して病床の身を慰む）、浜田文子（東上の際数日滞在）、森脇田鶴子（時代祭見物、大学病院受診）、秋田良子（帰郷の節三日程校内淹留）、秋山杜良子（夏期令兄訪問の為来校数日逗留、

九月中旬病を養ひ今猶滞在)

春
ニップ夫人、本学期は個人的に英学の力不十分なる我が女生徒の爲めに時間を割きて教授の労を取らる。かかる便宜は我女学校以外多くなき所なるべきか。

4・24
ハリス博士(明治初年来日宣教、勲四等)今回布哇より単身飄然我邦に來られ同志社チャペルにて犠牲的生涯の必要について一場の演説。

5・21、22
バックストン、兩日同志社チャペルにて演説。演説すみたる後女学校にて洗礼志願者の爲めにすゝめを乞ひ又信仰上の質疑等に答へを求めて益すること多かりしは謝す可き事也。

10・31
スカフダー(印度の宣教師)青木教授の通訳にて印度人の宗教に関する風俗に就て。

11・28
ミス・ヒュース(ケンブリッジ大学女子高等師範学校長、英国政府より万国教育事情視察委員として派遣)ミス・デントンの客として来校。

11・30
ミス・ヒュースと懇談会、若王子常盤亭、日本の偉人新島氏の墓畔に於て諸君と相見る事を得しは最も喜ぶ所なり余は新島氏の伝記を読み景慕の情禁し能はず思ふに新島氏の如き言を以てよりも行を以て福音を伝へられたり我等女性は言論を以てよりも行を以て福音を伝へられたり(中略)宜しく新島氏を学ふべきなり(足利姉通訳)。午餐後生徒に先き立ちて白菊南天を携へて山逕を攀ち故先生の墓前に臻り讚美祈祷の後大塚氏の通訳にて日本人は日本国を救へり他国の人は僅かに之を助けしに過ぎず。

11・30
夜ミス・ヒュース歓迎会。日本の教育機関の全権文部省の手に落ちて規律束縛の弊自然活動の妙用を欠き独立不羈独自一個の品性を養はしむる能はず、此時に方り同志社の如き基督教主義によりて立て

られし私立学校は最も其必要なるを感じずんばあらず云々と明快の弁を以て述べらる。

12・20 遊世清及生蕃男女数名、通訳一人、土倉龍次郎に伴はれて神学館楼上。

〈明治三五（一九〇二）年〉

2・7 潮田姉（足尾鉍毒被害人民救護会長）河原町共楽館にて演説会、我校寄宿生は病人を除き列席、各自

克已して貯えたる金を集めて救護会に寄附。八日潮田姉来校矯風会員及び有志数名面会。矯風会員、

一学年生、予科生より多少の金を寄附して同情を表す。九日舎内有志者の尽力により古衣服其他寄送。

2・24 〱 28 宮川牧師講演、神学校五番教室、日々最後の二、二列を占めたるものは我校の一教員と上級生となりき。

4・16 尾崎行雄、同志社礼拝堂「日英協商と仏露宣言と批評」學術講演。

4・26 徳留氏礼拝堂に於て講話。古代より王朝までの歴史と現今我国の狀態と比較。

5・10 〱 安田長造（桑原千家流）毎週土曜学校に聘して挿花の稽古。

6・27 卒業式、片岡健吉校長就任式、大森鐘一知事訓戒、木下京大総長、雨森代議士、田中府視学、川崎府

会副議長、木名瀬典獄、師範学校、中学校、高等女学校長、その他内外の紳士淑女二百余名。「新校長歓迎の歌」女生徒の一群合誦す。

10・3 楠本（カリフォルニアに伝道）講話。

10・17 慈善園遊会、山口精一開会の主意、留岡氏家庭学校の為当校の上級生が熱心なる周旋により当校庭内に開く。

1・11 アーレン（米国女医）久しく印度にありしが此度帰国の途次電頓師の客として来校、ラマバイ夫人の

慈善的事業につき勸話。

- 1・30 グリソン師、午後六時半より同志社礼拝堂にて日野教授通弁、聴衆は我男女学校よりのみならず各教会よりも多くの青年集まりたり。

- 2・1〜3 トーレー博士、女学校礼拝堂にて宗教に就き熱心なる演説。

- 4・25〜5・6 ビックス嬢（我女学校に毎年巨額の金を送られて同情を寄せらるゝ、太平洋伝道会社員）、リーデル嬢（ビ嬢の師伝なる独逸婦人）電頓の賓客として当校に迎う。五月三日午後七時より新入寄宿生徒の親睦を兼ね両嬢の歓迎会。六日教師生徒一同両嬢と共に撮影し今様を歌ひつゝ、一行を見送りぬ。

- 5・15〜 ケレー教師毎木曜日来校三十分づゝ、全生徒を集め発音の法を授けられ短き時間と雖中々に有益なり。

- 5・27、28 ウッドフォード將軍（前西班牙全権公使、コロ子ル大学社員）当校にも立寄られ參觀、金百円を寄附せられたり。二十八日礼拝堂にて演説、中瀬古教授通訳。

- 6・3 ニーメント（米国宣教師、北清事變の時英国公使館に籠城し九死に一生を免れたる一人）礼拝堂にて當時の実歴談。中瀬古教授通訳。

- 6・23 西山（旧同志社教師）台湾人男女十数名を伴ふて来校、電頓の厚意にて茶菓を饗せられ、女生徒の薙刀、琴、オルガンの合奏などありき。

〈明治三六（一九〇三）年〉

- 2・14 当校にて市内各教会連合婦人祈祷会。関たき子司会、ミス・ハウオルス独吟、生徒の唱歌。
- 4・21 古谷久綱、同志社公会堂にて講演。

- 7・1 同志社第二八年卒業式、女学校普通学校神学校の各部合同、村岡範為（京大理博）演説。
- 11・ 松田みち子姉（神戸女学院教師）十余名の学生を引き連れて来泊、此の一行は我校に同情を寄せて基本金の一部に加へ玉ひしものありしと。
- 11・22 稲森鑄代太（聯合共励会幹事）来校、六時半より一場の演説。
- 12・12 海老名弾正、デントン宅に滞在、十三日朝説教、十四日講演同志社公会堂。
- 1・23 フニーシヤア婦人（太平洋沿岸婦人伝道会社長）来校、茶話会。
- 3・3 〃 ホール（米国ユニオン神学校長）共楽館、同志社公会堂にて連夜講演、日野教授通訳。四、八、九朝説教。四日より夫人令息令嬢方はデントンの客となり十一日生徒の催しにて親睦会。
- 4・ ファオラー（デントンの友人）一週間ばかり滞在。五月四日奈良に出発の際金五百円を本校に寄附せられ。
- 4・ ミス・グラワー（ニューヨーク）、ミス・ヴェリー（カリホルニア）現今来遊中本学期中好意を以て本校に教授せられつゝあり。
- 7・1 女学校創立第二五年期記念式、フィッシャー夫人（太平洋伝道会社副会長）祝辞、演説デビス教授。
- 9・21 レンウキツク夫人、令息校内に滞在せらるゝを機に歓迎と同志社教職員親睦会。デビス博士の女婿ワールドの歓迎を兼ねる。
- 11・13 ハースト夫人、来校せられ生花、茶湯、体操等参観。生徒一同ヘクリスマスの賜物として金一百円を寄せられ其上基本金へ金二百円寄附の旨約せらる。来春花笑ふ頃再来せらるべしと。
- 11・24 アッキンソ嬢、山口姉帰省中に付き音楽教授として神戸より毎週二日来校、二十四日より教授せらる。

12・11 女学校文学会、ダヲ（コロンビア大学教授、ボストン美術館日本部長）「余が日本美術より受けたる教訓」講演。滑谷快夫（東京曹洞宗大学林教授）来会、神学校教頭アルブレクトと同伴。

12・ シヤープ（元第三高等学校教授）沙翁講演、夫妻相携へて我校内に滞在せられしが四、五年の両級生へ毎週「マーチャントオブベニス」を懇切に講演せられたり。我校体操科に非常の興味を感ぜられ来三月までに体操遊戯等に関し最良の進歩を示したる学生に銀時計一個を贈らんと約せらる。

〈明治三七（一九〇四）年〉

5・25、26 木村清松（巡回伝道者）来演、是まで基督教を是認し居ながら受洗とまでの決心のなかりしものに奮ひ起りて遂に受洗の決心をなすに至りぬ生徒。（6・3 洗礼志願者告白会）

1・16 レッグ歓迎会、午後七時より生徒の催、英語暗誦（レッグ嬢自作）、活画、謡曲、尺八、狂言などありし。

1・18 教員親睦会とレッグ嬢の歓迎会、アルブレクト宅、下村校長英語歓迎の辞。

2・11 紀元節祝会、シユ子一ター（東北学院院长）演説。

4・14 ウイチャー夫人、巧妙なるヴァイオリン演奏に学生一同耳を傾くる喜を得き。

4・23 ハッチ歓迎会、午後七時半より今出川幼稚園にて寄宿舎生は一同此会に臨み親睦。

招聘説教者・第三学期

1・17 原田助（神戸教会牧師）「組合教会の由来」。2・21 本田庸一（青山学院院长）「成徳三要」3・

3 小崎弘道（霊南坂教会牧師）「新生命の泉源」。

第一学期

- 5・1 宮川経輝（大阪教会牧師） 5・22 武田猪平（兵庫教会牧師）「帝国の進運と偉大なる人格」
6・12 原田助「説教洗礼晚餐」。

〔明治三八（一九〇五）年〕

- 6・18 網島佳吉（東京番町教会牧師）本学期招聘説教者として来校、午前説教、午後「日本プロテスタント教」講演。
10・9 堀貞一、満州よりの帰途女学校に於て同地観察談、公会堂に於て男女学生の為詳細なる演説。
10・28 神戸女学院教師西山姉は生徒十余名を引き連れ来校一泊。
11・28 古谷久綱（韓国統監府秘書官）我校の各部を視察、家政館に於て晩餐会、家政科割烹器具購入費金拾円寄贈せられたり。
12・6 文芸会、新渡戸博士演説、門田翁狂言文章朗読。
6・8 シー・ヤング・ライス（米国少壮詩人）夜八時女学校客室に於て自作短詩朗吟、来聴者の主なるものは新渡戸博士夫妻、タードリチ教授夫妻、独人ベルトルド博士。
10・9 プライアン、公会堂に於て演説、日野真澄通訳、男女学生悉く列席す。
10・23 バウン博士、三日間毎朝講演。10・26 公会堂に於て一般学生の為演説「学生の任務」日野教授通訳。会後校長の招待茶話会、来賓には大森知事、新渡戸博士夫妻、其他内外教師教役者数十名。
11・1 シャープ、昨年来度々来校、運動に熱心にして技術に巧なる専門科二年和田末葉子に銀時計贈与。
11・30 同志社第三十年卒業式、欧米紳士淑女も廿余名来会。丹羽清次郎（東京基督教青年会幹事）聖書朗読祈禱。

12・11 ケンメル嬢、日露戦争に於ける傷病者につき一場の談話。

12・ ペイン夫妻（英領香港よりの漫遊旅客）過日女学校參觀、帰途清国貨幣五十両を寄附せらる。

〔明治三九（一九〇六）年〕

1・28 牧野虎次（四条教会牧師）「世に勝つ者」説教。

2・9 本田庸一（万国基督教青年会大会代表者）本校の招聘を諾し公会堂に於て各学校生徒の為に欧米実験談。

2・11 宮川経輝（大阪）紀元節式後説教「理想の品性」。

2・16 松尾音平、祈祷会後謝辞、一昨春鴨緑江軍に従軍、牧会の為東上。

3・2 小池幸太郎、祈祷会後謝辞、昨年二月召集令従軍、今度渡米。

3・30 第三一回卒業式、田中視学官（大森知事の祝詞代読）。

4・10 長谷場ちき子、御良人御同行にて学校訪問せられ五日ばかり校内に滞在せられたり。

4・15 吉崎彦一（京都市青年会幹事）説教「復活の意義」。

5・11 佐伯ドクトル、衛生講話、同志社公会堂、我校生徒も之に赴く。

5・13 千葉勇五郎（前女学校教頭）説教「キリスト教信者の覚悟」。

5・27 佐々木国之助（室町教会牧師）説教「小事に忠実なれ」終りて小林富次（東京）欧米漫遊談。

6・14 松田幸子、音楽修業の為七年有半の間米独二国に滞在。神戸に安着、デントン、松田の両嬢に迎へられ入京直ちに我校に入られたり翌朝は名古屋に帰られ、6・22再び来京せられ、7・2名古屋に帰られたり。

- 6・15 村井吉兵衛、夫人、阪田夫人同伴、生徒一同に朝鮮満州に於ける実見談に加へて一場の奨励。
- 6・16 江原素六、同志社公会堂に於ける演説を終りて後我校を參觀。
- 6・17 牧野虎次（四条教会牧師）説教「生き甲斐ある死に甲斐ある生涯」。
- 6・ 三木真砂夫人、我校の聘に応じ六月より家政科生徒に茶の湯を指導せらる。
- 6・20 吉崎彦一、説教「基督の權威」。
- 11・ 4 横井時雄、村井貞之助（東京校友会）来校。
- 12・25 加藤彝（軍艦見島乗組海軍機関士）来校、職員生徒の為に日本海々戦の状況を語られた。
- 1・ 1 パターソン嬢（米国婦人）昨年末入洛、デントンの許に滞在、一月より三月末好意をもって高等学部生徒の為に松田教師の通訳によって西洋美術史を講ぜられた。
- 2・ 2、4 ギニース博士（著名なる慈善事業家、伝道師、倫敦に伝道学校設立）本校にて数度説教、祈祷会に特別奨励。
- 2・ 2 ヘレン・エジス・レッジ（東洋学者として名高きレッジ博士令嬢）一年間我校で教授。二月東洋経典、支那経典、翻訳註解書十四冊を寄贈。
- 2・20 スミス夫人（米国伝道会社）今出川幼稚園に於て歓迎会、ミッションスクール視察の為来朝、同窓生一同も招待せられ列席。
- 5・15 ホルトン嬢（英国有名説教者ホルトン博士の令妹）午後七時校内に於て歓迎会、博士の性行談及び印度土産の珍らしき物語を語られたり。
- 王（支那婦人）已に数月間デントンの許に寄宿せられ、音楽及び英文学を研究せられつゝあり。

シャープ、数月デントンの許に逗留せられ、十一月頃上海に向け出発に当り生徒一同に告別の辞。体育上成績良好の者に銀側時計一個を寄贈すべき事を約せられたり昨年も同様の好意を表はされし。

《明治四〇（一九〇七）年》

- 1・8 宮川経輝、第三学期始業式に理事、常務委員を代表して態々来校。
- 1・28 松村介石、公会堂に例の快弁を揮へり。伝道論。
- 2・4 西原清東、公会堂に於て演説「テキサス実見談及び桑港学童問題」。
- 4・27 原田社長兼校長就任式、来賓・府高等官、市長、大学高等学校中学校高等女学校の校長、教員。京阪神の牧師、宣教師等合計二五〇余名。祝辞・古木虎三郎牧師、田村正直共励会代表、ジラディン印度ラホール大学教授、祝電・牧野伸顕文部大臣、伊藤博文侯爵、大隈重信伯爵、エール大学総長、アマスト大学総長、ラッド博士、米国伝道会社主事、東北学院、松村介石、徳富猪一郎その他。
- 5・9 山室軍平（救世軍少佐）ブース夫人に関する感話。
- 5・26 創立三十年祝会、新島未亡人、東京の理事、丹羽前校長、市内組合教会牧師、同窓会員。
- 5・28 記念音楽会、ラル子嬢、テ子一君（オルガン独奏）、藤田胸三郎他二名（ヴァイオリン合奏）、シエパード・ニコル嬢（ペンシルバニア、ピアノ独奏）、神学校有志（合唱）、武田牧師（「我日の本」独吟）、伊原君大島夫人西山夫人（琴合奏）、松本亦太郎（演説「宇宙感情」）。
- 10・24 村井貞之助（理事）。渡辺恒子（日本婦人伝道会長）。
- 11・14 梅高普行（豊前中津町扇城女学校校長）。
- 12・6 箱館女学校女教師二名。

12・10 鷺見姉（救世軍）寄宿舎一泊、翌朝の集會にて講話。

学校參觀人（明治三十九年九月～明治四〇年六月）

大島多計比古（私立名古屋中学校長）、中澤正七（金沢北陸女学校教頭）、堀尾金八郎（津山高女校長）、西川巖（プール女学校教頭）、橋本なつ子（大阪紫江裁縫女学校教師）、松田協輔（名古屋地方裁判所檢事正）、大村忠三郎（大阪清水谷高女校長）、アザライア（印度基督教青年會代表者）、傳銳（清國人）、宋庄林（清國人）。

2・10 ラッド博士、公会堂に於て講演「宗教と社会改良との關係」牧野牧師通訳。

2・12、14 ラッド博士、神学館に於て講演、神学哲学に關して、日野教授通訳。

3・11 ラウス嬢（英国基督教青年會婦人主事）万国聯合青年會のため來朝、京都滞在中はデントン方に止宿。

3・11 生徒一同に對し一場の演説。五月再び來校。

3・27 第三二回卒業式（但し女学校は三十学年）アンリー・ボア（万国青年大會仏國代表者）演説、日野教授通訳。島田三郎演説。

4・14 シンプソン博士、大演説會「衛生と宗教」福田令寿通訳。

5・11 ブース大將、熱誠の教訓、終りに祈禱。

5・中旬 ブラオン女史（デントンの友人、加州の有名なる女医）二週間ばかり滞在、生徒の為に生理衛生講話。

6・6 ボスウォース博士（オベリン大学教授）公会堂にて講演「人の為し得る最善」日野教授通訳。

9・16 ニコル夫人、同令嬢（米国ボストン）朝の礼拝にて夫人はピアノ、令嬢は一場の講話。

- 9・26 ビリング夫人、令嬢ハギンス嬢、同夜嬢はヴァイオリン、夫人はピアノ伴奏、女生徒を楽しめらる。
- 10・13 タフト卿（米国陸軍大臣）同夫人、接伴官、寺島伯、渡部式部官。公会堂では数百の男女学生は起立して歓迎。演説「予は子等との同一の主義に立ち同一の持説に依りて組織せられたる此学校の隆運を祝し且つ之に在学する諸子の為に祝意を表す」と。一同社長の発声に連れてタフト卿万歳を三呼したれば氏は満面笑を堪へて日本語にて「有難ふ御座います」と挨拶されたり、此時吾女学校生徒を代表せる二年生荻野妙子はタフト夫人に美麗なる花束を呈しぬ。かくて一行の堂を出でて三輪の馬車に乗じ二条離宮に向はんとするや学生は校庭の柵により万歳声裡に之を送れり。
- 12・12 テイト（救世軍大佐）朝一場の講話。
- 12・12 宋秉峻（韓国農商工部大臣）古谷総監秘書官、農商工部書記官有範益と来社。公会堂にて流暢なる日本語にて演説。男女両学校の生徒、外来傍聴者あり、楼上楼下立錐の地なかりき。

原田助の社長就任がこの年の四月二十七日であるのは採録した。原田時代に本稿に関係する重要な一つに情操教育の一環として科外講演が設けられたことがある。これは海老名弾正総長、大工原銀太郎総長時代に継承された。大工原は「財団事業報告（昭和四年）」で「努めて理智偏重の通弊を避け、靈性の啓発及び徳性の涵養に、格別なる注意を払ふべく「宗教教育、並びに各種科外講演、及び寄宿舎教育を以て徳育の三大方策と爲し、従来最も重要視し来れり」と述べて科外講演の意味づけをしている。さらに科外講演については「随時内外の名士を聘し、凡わる方面の問題に亘り、広義の情操教育の一方法として、各学部とも、屢々科外講演を行ひ来たれるが」、「宗教問題及び国際心の涵養に資する講演特に多き点」、「官公立の諸学校に比し、特殊の便宜

を有せる点より考察し、今後も出来得る限り継承発達せしむるやう意を用ふる所あらんとす」と追述している。^⑤
『同志社百年史』では「原田総長時代の同志社」の章で原田時代（一九〇七・四〜一九一八・一〇）に来学した主要な講演担当者一覧を一〇ページにわたって掲載している。^⑥『同志社談叢』はより詳細な「科外講演者リスト」（一九〇七・四〜一九二八・一二）を作成している。^⑦すでに「同志社社長兼校長報告」では大正元年度以降「来賓及科外講演の項」を設けて「各学部に於ける科外講演の重なるものを列記」している。本稿が『同志社女学校期報』から拾う来校者と重なる人びとも多く参考になる。

〈明治四一（一九〇八）年〉

1・16 留岡幸助（理事）朝の講話「経済と感恩」。

2・25 麻生正藏（日本女子大学校学監）来校、欧米婦人の状態及教育の近況を視察せられたる所感語られたり。

3・26 同志社第三三学年卒業式（女学校は第三一学年）岡田良平（京都帝国大学総長）演説「予が文部在官中同志社に対して甚だ冷淡なる待遇をなしたるが如く誤解せられたらんも計り難けれども予の意は宗教と国家教育を混同すべからずとの精神より出でし訳にして決して私立学校に対する悪意に出でし次第に非ず私立は国家教育の安全弁なり官立学校と相俟って行はる、時は刺戟となり国家の為に効益する所決して少からず予は殊に同志社の如き特殊の教育主義を以て立つ学校の益々隆盛ならんことを望む」との主意を。

4・9 多賀貫一郎（兵庫県穴栗郡山崎技芸専修学校長）来校。

- 4・10 古谷久綱令夫人一行は三宅利平、岡本庄三郎、平瀬俊二、江崎権一、伊藤良三、西池成義と共に来校。
- 4・28 毛利湛然（京都新聞主筆）来校せられ翌日の同紙上本校の事情を詳報せらる。
- 5・1 宮川経輝、朝の講話「外形の美に優りて内心の美德を涵養すべき事」を懇論せらる。
- 6・9 綱島佳吉（番町教会牧師）朝、維新の烈女野村望東の事を講話せらる。
- 6・10 木村清松、夜及6・11朝、6・15、16夜女学生の為に伝道講演を行はる。
- 7・22 太田寛三（明治三〇年頃同志社に奉職の漢文教師）来観。
- 9・28 ドクトル天畑接三、来校。
- 11・19 半田たき子、去三九年来英国留学中なりしが神戸に上陸し直に母校に来られ数日滞在。
- 11・ 第三回創立記念式、牧野虎次、浜岡光哲、本多庸一（メソジスト派監督、青山学院院长）演説、感話。
- 2・12 ハミル（万国聯合日曜学校幹事）科外講演「ポーロがテモテに贈りし書」。
- 3・2 ブリッグス（米国桑港の神学博士）夫妻来観、講話。
- 5・10 チャンゾラー（印度極南の一市に於て女学校経営）夫妻、印度に於ける女子教育の現状を説話。
- 6・4 ヒックス（アメリカンボード派遣員）夫妻、公会堂に於て土耳其に於ける基督教発展の景況演説、中瀬古教授通訳。
- 7・20 スタム嬢（ニウヨークヘラルド記者）来観。
- 9・3 オンワード・ベーツ（シカゴ府建築技師）夫妻は犬塚清吉に案内され校内參觀。
- 9・12 ウエンライト姉、一四日まで奄留。十月中旬本校慈善市開催の際、応援の為来京大に尽力せられた。
- 10・14 誠猷義（清国北京組合教会員）英国留学の帰途半田瀧子姉の紹介を以て学校を參觀。

- 10・下旬 京都に来遊の米国太平洋岸商業会議所代表者中我男女各学校に參觀せられるもの多し、一行中のチ
ヤールス・クック（布哇国銀行家）の如きは五年前我校を參觀せられたる事あり。且つ其息モンテギ
ユー・クック（ホノルル府博物館長）は本校教頭の在米中同窓たりし等の故を以て特に同情を厚くし
邦貨八百円をデントン女史の手許に寄贈し且つ帰米の上更に聊か尽す所あらん事を約されたり。

12・4 ハート（ハーバード大学歴史学教授）朝一場の講演。

〈明治四二（一九〇九）年〉

- 1・ 小北いつ、一月来校校内に寄宿して神学校の講義に出席し居られたるが五月良人の伝道地なる北海道
天塩名寄に赴かれたり。

1・23 市内私立女学校校長会我校に於て開催。来会者は根本吉太郎（府視学）、井村則久（府教育会教員養成
所々長）、川名庄吉（菊花高女校長）、加藤清次郎（高等家政女学校主幹）、宮原正喬（精華高女設立
者）、福田芳峯（女子和洋技芸学校）、甲斐和里子（文中園女学校）、中村朝貞（京都女子手芸学校）、
竹中茂恒（平安女学院）。

2・12 竹下（秋山）とも、実兄広川友吉葬儀列席の為来京、二、三日間校内に宿泊。

2・14 丹羽清次郎（折柄滞洛中なりし前校長）説教「教育上に於ける伝道心の価値」。

2・15 永江（広瀬）いと、幼児を携へて来訪。

3・9 菱沼平治（広島高等師範学校教授）英語教授方を視察。

3・25 同志社第三四回学年卒業式（女学校は第三二学年）、大森鐘一府知事告辞、来賓、荒木医科大学長、

塩川日本銀行支店長を始め学校長官吏牧師宣教師等も多かりき。

- 4・7～13 高山繁（東京の諸学校、貴顯邸宅に於て新式洗濯法を講じ高評嘖久）同窓会有志の發起にて洗濯講習会。原田校長挨拶閉会。
- 4・26 大竹敬造（北海道十勝帯広町高等小学校長）学校參觀。
- 4・ 大村忠三郎（大阪府清水谷高女校長）教育懇談会準備の為来校。
- 5・8 守屋東子（婦人禁酒会少年部々長）同会要務の為来校。
- 6・3 巖谷小波、京都婦人矯風会主催講演は裁縫室に開かれたり。
- 6・9～11 村田平三郎、三日間毎朝の講演に於て福音図解伝道。
- 1・8 シェーフアー夫人（米国植物学者）夜祈祷会後裁縫室に於て英領コロムビア探險の幻灯会。ホーン（府立第三中学教師）灯画を操られたり。
- 1・15 シェーフアー夫人、告別挨拶あり。
- 2・2 アーサー・スミス博士（清国宣教師）公会堂に於て講演「清国の現在及将来」。
- 2・3 ケペン博士（米国伝道会社長ケペンの令息）夫人と共に昨年来世界漫遊の途上、校内を通覧。
- 3・9 ミース伯爵夫人（英国奉仕同盟会主唱者）講演。
- 4・28 パーク夫人（米国婦人選挙権拡張会員）選挙権問題に関する講演。
- 5・18 カッスル夫妻及令嬢（ホノル、府）、ウツド夫妻（ハーバード大学比較宗教学教授）及老母の六氏来校、同夜女学校内にて有志小会を開きウツド、印度に於て一年有半の滞在研究の結果に關し講演。
- 6・12 ベアード夫人（シカゴ婦人伝道会本部役員）、ハールバット夫人（會計）、ウインゲート嬢（書記）、当校同窓会員、神戸女学院同窓会員及京都諸教会婦人会の連合歓迎会に臨み演説、ハールバット夫人

は我校に三夜滞泊、時々学生等の為に談話を試みられたり。

6・12 フロレンス・オルチン嬢（在大阪宣教師オルチンの第二女、数年間ボストン音楽学校で修業）全校生徒整理して迎え歓迎会。

6・15 フェーアバンクス（米国前副総領）公会堂に於て大演説、終りて日野教授其大体を通訳。

7・3 ジョセフィン・デントン嬢（ミス・デントンの令妹。カリフォルニア州サンノゼー市州立師範学校教師）夏季中主に京都に滞在し時に諸方漫遊。

7・18〜8・7 チップマン嬢（布哇国州立高等学校家政科教授、絵画図案科）、ハント嬢（家政化学）家政館に宿泊して日々市内の陶磁器、染織工場に来往研究。日本人一般の生活状態を実験的に視察。バルトン博士（シカゴ大学東洋教育調査委員）一日当校に立寄られ、当校の設立の始末、方針、財政の現状、社会に於ける勢力等に就き詳細調査。

7・下旬 ハーデー（ボストン市、新島先生の恩人の嫡孫）南洋行の途次、態々来京、校長宅を訪ふ。

〈明治四三（一九一〇）年〉

3・25 同志社第三六学年卒業式（女学校は第三四学年）綱島佳吉（東京麹町番町教会牧師）奮闘は健闘ならざるべからずと訓辞。

3・31 市原盛宏（韓国銀行総裁）韓国赴任の途次来校、校長教頭及来校中の宮川、デビス両氏等と茶菓を共にし閑談。

4・1 元良勇次郎（東大教授文学博士）校長を相伴ふて校内普く巡覧し女学校にて茶菓の饗をうけ今昔の感慨いとど深き由を語る。

- 5・6 大隈伯演説、全校生徒職員公会堂に参集、伯は女学校生徒より捧呈したる二把の花束を高く掲げて「花は美なり、美を愛せざる人やはある。美を愛する人の心は善なり、花は自然の美なり、自然に騙謫なし、自然は真なり、即ち真善美を代表す、同志社女学校の諸嬢も励で花の如く真善美の域に進まれよ」との熱烈なる訓誨を賜はりたり。
- 5・16 西原光太郎（府視学）事務取扱の模様及学程教授の状況等視察。
- 5・28 田中正尾子、地久節祝賀会講話。
- 7・11 鷹見久太郎（東京婦人画報主筆）学事視察。
- 7・12 婦人矯風会第一九回大会（本校体操場）大森府知事、蟹江視学、谷本、桑木両博士帝国大学教授祝辞演説。大森知事は今回初めて同志社女学校に來られたること、て大に寄宿舎の設備を賞讃せられたり。大会中地方代議員四十有余名は平安寮内に宿泊。矢島楯子（会頭）、小崎千代子（役員）、守谷（書記）、横倉、デヴィスの諸姉は富森幽香（京都部会長）と共に尽瘁。來会せられたる同窓生多数あるを以て十三日校内食堂にて歓迎親睦会を開き、市内在住の諸姉をも招きたるに列席五十名近くもあり、席上新島未亡人、小崎夫人、杉田夫人、田中竹子子夫人等の感話ありき。
- 8・1 静和館新築地鎮祭、佐藤府視学、祝辞新島未亡人、中村栄助。來賓、増沢長吉女子師範学校主事、中目成一陸軍々医監、内田新也第三高等学校教授、各新聞記者等、会衆百余名。
- 9・4 谷口金太郎（滋賀県立大津高女教諭）、後藤英五郎（同）參觀。
- 9・26 海老名夫人（東京同窓会支部長）校内に滞留、二八日朝、二九日朝説話。
- 9・27 海老名弾正、朝講話「孝道」

- 10・11 田中義行（愛媛県立宇和島高校長） 数日滞京、本校卒業生立石俊栄子を同校英語編物教師兼舎監として聘用の約を立て、帰県。
- 10・26 藤沢利喜太郎（東京大学教授理学博士） 英語教育調査の為京都府へ出張、女学校を訪問せられ職員等と晚餐を共にせられたり。
- 11・16 辻新次（男爵、帝国教育会長） 随員二名を従え来校、各校隈なく看觀せられ、各教頭にも面会、大いに同志社に同情を表せられたり。
- 11・30 小崎弘道、校内女子青年会の為に一場の講演。
- 12・2 生駒万治（文部省視学官）、高崎府事務官、佐藤視学、本間府属、蟹江市視学、女学校普通学部に対する専門学校入学者検定規定の指定願書に關し当校に臨檢。
- 12・14 高橋（府立第二高女校長） 来校。
- 12・19 留岡幸助、来校。
- 1・5 クラーク婦人、米国クラーク大觀光団一行と共に来朝、婦人を招待し当校内に於て盛大なる歓迎会。
- 3・21 学年終業式、オークリー夫人（米国より来遊） 講演「善良市民兒童義会」、来賓中にはアラルド嬢（仏国グルノーブル市高等女学校教授）、鈴木文治（東京朝日新聞記者、法学士） 式後來賓と昼餐を共にせり。
- 5・12 キング（オペリン大学総長） 帝国大学及同志社に於て数回の講演。女学校にも立寄られ教職員と晚餐を共にせられたり。
- 5・23 フェノロサ夫人、来校せられたるを幸ひ一場の講演を乞ひしに約半時間余の「美術趣味の涵養」講演

あり。

5・27 アルフィアス・ハーデー夫妻（新島襄先生を保護して学成り業を卒へしめたる米国ボストン市の紳商人ハーデー氏の令孫）新島氏の偉業を視察せんとて着京早々我校に来られ男女両校を參觀して後、若王子新島先生の墓側に至りて新島先生の逸話等を物語られつゝ下山し、直ちに、新島邸に至り先生の遺物を観て感慨頗る深きもの、如く聴く者をして先生の精神の非凡なりしを感ぜしめたり。

6・1 ブラウン夫人（太平洋岸婦人伝道会副会長）良人と共に東洋漫遊の途次入洛、詳はしく本校の現状を研究せられ本校食堂に於て教職員一同と共に日本食を喫して懇親を結ばれたり。

6・22 英皇戴冠式祝賀会を兼ねて本学期音楽温習会（女学校仮講堂）。別に来賓中より英国婦人サウター嬢独吟、米人カップ夫妻ピアノ連弾、坂本音次郎、村岡博士の二令嬢琴尺八の合奏、上田敏（文科大学教授文学博士）祝辞演説。当日の来賓中には宮崎京都府事務官、村岡帝国大学教授及家族。京都ホテル、都ホテル、世阿弥ホテル及市内在留の英国紳士貴女等無慮数十名。

6・25 ウエンデル（ハーバード大学英文学教授）夫妻令嬢の入京を期して本校講堂に於て京都平和協会主催の歓迎茶話会、帝国大学総長菊池男爵、末広、松本両教授、高崎京都府事務官等約四十余名来会。

7・7 学期終業式、来賓、斐瑞芝嬢（清国北京連合女子学堂教師、米人ミス・ペイン）

9・15 ダンカン・フェルガソン（台南府英国宣教師）夫妻。

11・30 フェルプス女史（米国より清国伝道への途次）来校、小崎弘道に続き一場の講演。

〈明治四四（一九一一年）〉

1・5 大村（大阪府立清水谷高女校長）、大田原（同教頭）来訪。

- 4・25 亦座忠義（函館大谷派女学校長）来訪。
- 5・23 梁田忠山（宮津高女校長）来校。
- 7・18 新渡戸稻造（第一高等学校長農学博士）来校。
- 8・1 新島未亡人、新校堂静和館地鎮祭。
- 8・2 宮崎小太郎（愛媛県立宇和島高女教頭文学士）弘松磯之助（同所中学校教諭）本校寄宿舎を視察。
- 8・4 春日隆子（東京女子高等師範学校舎監）寄宿舎来観。
- 8・17 新築校舎建築委員会、校長原田助、教頭中瀬古六郎、建築主任武田五一、委員デントン、佐伯理一郎、安藤乙三郎。
- 9・11 小泉千代子、来訪、浅井政栄子、同上。
- 10・14 古谷重綱（大使館書記官）夫妻。
- 10・17 久保田綾野子、大連へ罷越さるる途次学校へ立寄られたり。
- 11・6 増沢長吉（府立女子師範学校教諭）来訪。
- 11・7 遠山参良（九州学院々長）来訪。
- 11・24 古谷久綱（理事）朝女学校講堂に於て故伊藤公の母堂に關し講演。
- 11・29 西尾幸太郎（平安教会牧師）定礎式祈祷。
- 12・4 富永実達（大阪プール女学校教員）来訪。
- 2・11 ウイツテ（独逸国伯林伝道会幹事）東洋伝道視察の途上来校。
- 3・13 ニコラス・モルレー（ジョンホプキンス大学前図書館長）東洋各国を巡視中来校。

- 3・14 ロバート(救世軍大佐) 山室軍平大佐と共に来訪。
- 3・15 リチャード(布哇ホノル、市資産家、「フレンド」誌発行者、中央太平洋学校会計) 日米親善の爲め
布哇留学生募集のことに付滞洛中来校、朝の講堂にて一場の感話。
- 7・29 ロバート・ヒューム(印度宣教師) 二九日、三十日校内に宿泊せられたり。
- 8・9 朝鮮牧師団、本校仮講堂(平安寮内) に於て茶菓を饗す。原田校長歓迎の辞。皇城青年会総務金麟通
訳。崔炳憲(京城貞洞第一教会牧師) 答辞、朝鮮総督府警部村上唯吉通訳。团长丹羽清次郎の外朝鮮
牧師等約三十名。終りに朝鮮語にて讚美歌及祈祷あり。
- 9・9 ルイズ・デフレスト嬢(故仙台宣教師デフォレスト博士令嬢) 本年夏期帰朝、九月より授業を始む。
- 9・23 ジョルダン博士(スタンフォード大学総長) 公会堂にて講演「経済より見たる戦争の弊害」 牧野教師
通訳。本社諸学校生徒及校外よりの来聴者満場の盛会。
- 10・10 ハミルトン・ホルト夫妻来訪。
- 10・11 クロツス(ボストン府牧師) 来訪。
- 10・18 ヒル嬢、帰国中なりしが今秋再び来朝、デフレスト嬢を助けてピアノ及オルガン教授、傍ら英語英
文学を担当。
- 11・18 マーシャル夫人(米国声楽家) を聘し校内に於て音楽会、デフォレスト嬢、コップ等の伴奏あり、来
賓、田辺工学博士(帝国大学教授)、在留外人十数名、同窓会員数十名、赤十字社婦人部員及京都音
楽会々員諸氏。
- 12・4 S・L・ライス(オックスフワード大学卒業生) 及其母、妹来訪。

12・6 バビット夫人（ホノル、府）一行、学校を参観。

12・7 ミス・シャープ（清国北京清華大学教授）を聘して得意の独吟数曲を聞く。

〈明治四五（一九一三）年〉

1・14 徳富猪一郎、朝鮮よりの帰途来校、女学校事務所楼上に入り十七日迄滞在、数回講演、勸話。女学校にては十六日「明日の事を思ひ煩ふ勿れ唯現在を是れ勉めよ」てふ意味の講話。

2・3 松本亦太郎（女学校専門学部準備委員長）同窓会京都支部会、女学校平安寮内にて開催。松本より経過及将来の方針等説明演説。

2・23 安部清藏（東京より）洗礼晚餐式説教。

3・8 松本亦太郎、普通学部五年級以上を一堂に集めて今回新設の女学校専門学部の趣意方針を詳論。

3・19 教育者晚餐会、当校食堂に於て懇談会、高橋府立第二高女校長、清水市立高女校長、蟹江市視学、佐藤府視学及松本文学博士等の演説あり。生徒の手料理になる晚餐を終りて散会。

3・23 同志社第三七回（女学校第三五学年）卒業式、菊池大麓（京都帝国大学総長男爵）、石井勇（実業之日本記者）、上田敏（文学博士）等の演説、西原（府視学、大森知事代理）祝辞朗読。

4・11 松浦政泰（日本女子大学教授）例に依ていの一帯に同志社女学校を訪ふ。校内で一泊。

4・23 建築委員会。武田教授、松本教授、佐伯ドクトル。

6・3 千葉勇五郎、朝拝「受くるよりも与ふるは幸いなり」に就て講話。

6・8 浮田和民、専門学部学生に対し「過渡期に於ける婦人」の題にて講話。

6・17 露無文治（今治基督教會牧師）朝拝、英国土産談。

夏 谷喬（大分県立中学校教諭、十数年前本校漢文教授）来訪、旧門弟の二、三姉をも歴訪。

9・28 浮田和民「婦人の勇氣」理科室に於て講演。其他朝拝に綱島牧師、片山猪之吉、片桐鑄太郎の諸講話あり。

10初旬 福島綱雄（熊本尚綱女学校長、二十年前同志社男学校数学教授）我校の現況を視察。

10・11 工藤金彦（札幌高女校長）来校參觀。

10・22 古谷久綱、維新史講演は前回の続き。

10・23 徳富猪一郎、先帝御事蹟に関する講演。

10・29 置塩隆親（朝鮮釜山高女教諭）来校。

10・ 大岩嘉直（熊本女学校教諭）来校。

11・23 新渡戸博士、夜来訪され女学校内にて原田、デントン、中瀬古と晚餐を共にしたる後、寄宿生の懇請により「米国土産」として約一時間余に亘れる講話。

11・26 古谷久綱、専門学部の為め講演。

11・26 巖谷小波、普通学部生の為め講演。

春 クローフレード嬢、デントン方に寄寓し、竹内柄鳳画伯の門に入りて日本画の研究に怠りなかりしが

九月上旬長逝、葬儀は内外友人数十名参列の下に本校教師館にて営み遺骸は神戸外人墓地に埋葬せり。

6・17 エリオット博士（ハーバード大学名誉総長）同夫人、孫嬢及ボルス（秘書）。本社 of 招待に応じ来校。先ず女学校に至り原田社長同夫人……二十余名と午食を共にし校内及寄宿舎等一覽の後、公会堂に待ち構へたる全校一千の男女生徒に拍手を以て迎へられ、先ず英語校歌を唱へ、原田社長の紹介後、演

説、日野教授通訳。「高度の文明を維持せんが為めには男子と共に女子の教育をせねばならぬ。同志社が独り男子に教育を施すを以て足れりとしないうで女子部を設けて女子教育を奨励せらるるのは真に祝すべきことである。人類終極の目的たる公衆一般に高尚なる幸福を増進し社会文運の發達を祈るは我等の最大の急務である。諸子宜しく此意を体し大に励精せよ」と。

6・25

露西亜女学生の來訪。ペリヨーゾフ（ハルビン・アクサコフスカヤ女子中学校教授）統率の下に女教師二名生徒六名の一団は侯野（日露協会）及び市府吏員等の案内にて同志社女学校を訪問。中瀬古、小西両教師一行を迎へデントン宅に案内し五六の外国教師、觀光米国令嬢及び約四十名の専門学部女生徒等歓迎園遊し、同志社の女学生が先に露国々歌を唱ひ後君が代を合唱すれば露国女学生は又ピアノに対して歌を唱ひ互に打ち解けて此処に日露米三国人の隔意なき一大ホームは画き出されつ、晚餐を共にし霽々たる和氣は堂に満ちて快興つくる所を知らず生徒の手造りになる美はしき花束を珍客に贈り七時訣別したり。

7・5

第一期終業式、米國ブルーアー夫人の話あり、式後デントン宅にて一回御別れの会を開く。

9・30

ブライアン（駐日米國全權大使）、ビットル（秘書官）と共に來校。公会堂に於て男学生のため演説。それより自動車を驅りて女学校に來られ静和館前の庭園に集合したる女学生の為に日本固有の女徳なる柔和従順忍耐の諸徳を涵養すべきを勧奨せられたり、原田総長通訳。終て生徒は米國々歌を唱へ更に大使の望みにより君ヶ代を二唱し校門に整列して別れをなせり。

表4 大正期同志社女学校卒業生数

大正	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
普通学部	24	17	23	21	23	31	31	44	34	38	55	95	123	123
専門学部	2	7	11	10	4	20	13	19	40	40	46	34	80	115
選科						3	1							

四、大正期の来校者

大正期には明治期に比して生徒数が増加したのは表1・2と表4を参照すれば明らかである。

大正三（一九一四）年奈良女子高等師範学校教授であった雀部顯宜が同志社女学校教頭（校長は原田助社長）に就任する。翌年二月に京都府立女子師範学校、府立第一、第二高女、市立高女に奉職する東京、奈良女高師出身の女教師二〇名を招き懇談会を開いているのは雀部の地域との関係構築のひとつの試みだったかもしれない。彼は「本校教育の特色」を説明し、来会者を代表して府二の教師が「本校の為応分の援助を与へらるゝことを約」している⁽¹²⁾。大正中期からの専門学部の漸増傾向はそれとながしか関係したかもしれない。しかし、表4にみられるように、とくに大正期後半の専門学部の増加をみればその圧倒的多数は地方出身者であったことが想像できる。例えば大正一三年度「同志社総長報告」では「同志社女学校が寮舎を要することは男学生よりも切迫して居る。女学校専門学部の学生は多く地方より来るが故に、寮舎を要する、彼等には未だ下宿を許可するに至らないのは、善良なる下宿がないからである。目下応急手当として校外に仮に寄宿所を設けて居る。女学校普通学部の為めには従来のもので間に合ふとしても専門学部の為めには更に二百名を收容する寮舎を要する⁽¹³⁾」と報じている。寄宿舎

が依然重要な位置を占めたことに變りはなかった。内外の来訪者との交歓にもそのことがうかがえる。松本亦太郎が「来校、翌朝講演」とあるのも、生徒とは別に校内に宿泊したと考えられる。

〈大正二（一九一三）年〉

- 2・8 綱島牧師、朝拝に有益なる宗教上の講話。
- 3・25 第三八年卒業式、来賓長井長義（東京大学医科大学教授）温情溢る、祝辞演説。難波理科大学長、松本文科大学長、村岡理学博士、大塚工学博士、中村法学博士、大谷光明師代理、諸学校長、社友、校友、外国人其他学生生徒の父兄等。

- 4・初め 松本沢野子、次女敏子を本校普通学部一年級に入学せめんが為め来京、数日滞在。
- 4・ 杉田磯子、長女みつ子（ウイルミナ卒業）を本校英文科に入学せしめんが為来校。
- 4・10 普通学部始業式、松本博士、父兄は如何なる学校を子女の為に撰ぶべきぞとの問題に付て一場の演説。

- 4・15 専門学部始業式兼入学式、告辞松本教授に依て行はれ新入生二二名の宣誓。
- 4・16 古谷久綱「幕末十五年史」の第五回講演。
- 4・17 古谷久綱、午後二時より第六回講演、午後四時より一般生徒のため家政上の心得に関する講演。
- 5・5 教師館に於て教員の歓送迎会、松本博士、湯浅吉郎談話。
- 5・31 別役楨枝子、御良人同伴にて来訪。
- 6・3 雀部顯宜（奈良女子高等師範学校教授）来訪。

- 6・22 宮崎光子（新真婦人社）講話「修養上宗教の必要」
- 6・23 新渡戸博士「常識」に関する講演。
- 7・29 岡村鉉太郎（島根県浜田高女教諭）参観。
- 9・5 渡辺常子（日本女子伝道会長）朝拝に講話。
- 9・20 別役楨枝子、母校訪問。
- 9・26 松本亦太郎文学博士来校。翌二十七日朝拝講話「東西両京女学生の境遇比較」、午前十時より専門学部生徒の爲め「精神的物理的作用」講演。
- 9・29 大久保真次郎夫人来校。
- 9・30 村上方政来校。
- 10・24 松本博士来校、翌日専門学部にて心理学を講義。
- 11・5 天野梅可、朝拝の終りに勤儉貯蓄談。
- 11・15 三宅驥一理学博士、学校参観。
- 11・17 山室軍平（救世軍大佐）講演「神之摂理」。
- 11・18 上條辰藏（東京高等師範学校教授）生徒十三名引率英語授業参観。
- 11・21 松本博士来校「日本画審査の心理に就て」講演。
- 11・21 宮川経輝牧師「囚はれたる女」講演。
- 11・24 萩坂進治（彦根高女教諭）学校参観。
- 11・28 松本博士「文部省展覧会の日本画に就て」講演。

- 11・29 第三八回創立記念式、本校雨天体操場に於て挙行、東京網島牧師演説。
- 12・2 大須賀鉄雄（兵庫県三田中学校教諭）学校参観。
- 12・2 鎌田栄吉（慶応義塾）、石田新太郎（同）来校。
- 12・6 一ノ宮（救世軍）夫人、高木夫人来訪、求道者の為め有益なる訓話。
- 3・1、3、5 ハミルトン・ライト・メビー博士（日米交換講師）神学部講堂に於て三回にわたり講演「米国民の理想性格及生活」、講演後芦田教授講演の概要を通訳。終了後原田社長謝辞、博士答辞「久しく新島先生及同志社のことを耳にせしが身親ら本校に於て講演を為すの光栄を喜び日米交情の愈々益親厚ならん事を希望す」旨を語られたり。
- 3・2、4 ヘンダーソン博士（米国市俄古大学社会学教授）神学校講堂に於て英語説教。「経済的事実と社会的理想」講演、中瀬古教授其の大意を通訳。
- 3・7 ヤコビー博士（独逸ゲツチンゲン大学哲学教授）「精神的教育」と題する英語講演。
- 3・24 デントン宅にて卒業生送別昼食会、外賓パッターソン女史等のテーブルスピーチあり。
- 5・12 ビーボデー博士（ハーバード大学名誉教授）神学校講堂に於て講演。講演後ロムバート教授宅に於て茶話会を開き本社職員及在京米国人と懇談。ウキカーシヤ（前検事総長）も列席。
- 5・26 パーミリー女史（本校創立当時スタークウエザー嬢等と共に五ヶ年間教鞭）今回来校を機とし本校初代史に関する懐旧談を生徒の為に試みられたり。
- 6・15 チェーピン（米国地学協会員）一行の来京を迎え同氏父子に請ふて小音楽会。デフヲレスト嬢ピアノ伴奏。

7・29 李覚鐘（朝鮮総督府）参観。

9・14 ファザー・ケリー、日曜学校講話。

10・23 セジュレー嬢、最も健康的なりと称さる、体操術を舎生一同に伝授。

〔大正三（一九一四）年〕

1・5 足田（村岡）治子、母校来訪。

1・6 児島芳枝子、母校来訪。

1・23 松本教授、来校、翌日講演、午後七時帰東。

1・25 榎林幸子、母校来訪。

2・6 宮川牧師、朝拝に修養法に就いて講話。

2・18 金森通倫、朝拝に講話。

2・20 成瀬仁藏（日本女子大学校長）参観。

3・10 平岩恒保（日本メソジスト監督）朝拝に講話。

3・11 三好重彦（台湾総督府翻訳官）参観。

3・22 松本博士来校、三月二六日帰京せられたり。

3・25 山室大佐（救世軍）及高木、一宮夫妻来訪、訓話をなし、尚作法堂にて組々の集りに出席、病床の生徒をも見舞ひ慰められたり。

4・10 新渡戸博士、デントン宅を訪問せられしを幸ひ夕の礼拝にお話を願ひたれば新入舎生の淋しさに厚き同情あるお話をせられたり。

- 5・3 林歌子（大阪婦人矯風会長）及竹内梅子（同窓会員）来訪。青年矯風会より両姉に勧話を乞ひ會員一同有益なる訓話を承る。
- 5・29 松本博士来校、翌三十日心理学講演あり。
- 6・4 新渡戸博士夫妻、夜寮舎に於て修身講話。
- 6・16 成田忠良（京城公立高女校長）参観。
- 6・21 浜八百彦（学習院教授）参観。
- 7・2 松本教授、朝来校、三日午後講演、同夜帰東。
- 7・4 湯浅半月、夕ぐれ六時頃より平安寮の二階にて平家琵琶をうかがふ。
- 9・14 小檜山久作（京都府師範学校教諭）、並川栄治郎（同）来校、重に外国教師の英語教授を参観。
- 10・2 松本博士来校、三日専門学部生徒に書論と題し講演。
- 10・9 海老名牧師、朝拜に信仰の必要に関する一場の勧話。
- 11・5 松本博士、心理学講演。
- 11・6 後藤男爵、女子の心得に就いて講話。
- 11・19 山田瀨（校友）生徒一般の為に書法に就て熱心有益なる講話。
- 11・28 宮川牧師、創立記念祝賀式、体操場にて演説。
- 12・4 向後謙吉、家政科生徒の為に簡便なるパン製法の講習をなせり。
- 12・19 松本教授、入洛二十日専門学部の為に講演。
- 1・4 台湾国語伝習所生徒職員約八十名学校参観、教師館にて茶菓の饗を受けて東上せられたり。

- 1・9 専門学部新講堂定礎式、ウイリアム・H・デーイ（ロスアンゼルス市第一組合教会牧師、神学博士）演説、礎石定置祝祷「今より廿五年の昔、とある日曜の晩方、余は本館の寄贈者たるゼームス君と相携へてアーモスト大学総長シーレー博士を訪ふた。談偶々極東の事に及ぶや、博士は日本の現状より説き起して、同志社の教育主義と、其創立者新島先生の理想とを詳説された。これ実に余輩が同志社てふ名義を始めて耳にした時にて、其後二た昔を経過したる今日、かのゼームス氏の寄贈にかゝる大教室の定礎式に臨み、茲にこの式を挙ぐる光榮を有するは、実に一の奇縁である。抑も故新島先生の教育理想は四海兄弟、万邦親和の主義を基督の基礎上に実行せんとする者にて（中略）寄贈者たるゼーム君母子、故ゼーム君の理想も希望もまた実にこの基礎に外ならのである。現今我加州には妄りに排日説を鼓吹し、人種的僻見を主張するもの多きは、実に我米国文明の恥辱である。かくの如き謬見を打破する為め最良の解決は、唯だ真正宗教を基礎とせる教育の普及に俟つ所あるや明かである。（中略）今茲に四海兄弟主義と、万邦親和主義と、神の国と真義とを慕ふ理想とを標榜し、寄贈者たる同窓の親友に代り、父と子と聖霊の御名に頼りて余はこの礎石を定む」。
- 2・ 李昌林（朝鮮私立進明女子高等普通学部教員）参観。
- 3・11 ミス・ハーヴィー（印度マドラス）朝拝に女子教育に関する講話を為し、終りに同嬢の独唱ありたり。
- 3・11 フリート（加那太モントリオール）及令嬢参観。
- 5・28 ウエスターヴェルト（布哇国キャッスル家）夫妻、同夜女学校に於て講演会を催し同氏の撮影したる幻燈を以てパナマ運河工事の現況を説明せられ、同夫人は得意のピアノ弾奏。
- 6・4 ウォーターハウス嬢（加州パサデナ市）朝拝の後にて唱歌の独吟。

- 7・7 ヴインセント（ミソソタ州立大学長）夫人及令嬢及スウィーニー女史（同大学女子学生取締）来校。
10・26 ガウチャー博士（米人）所感講話。
11・13 アレン（加州平和協会々頭）朝拝に基督教婦人に就ての講話。

〈大正四（一九一五）年〉

- 1・7 松本博士、夕東京より来校、九日専門学部生徒の為希臘墳墓美術につき講演、同夜汽車にて帰東。
1・13 大多和キヨ（元奈良女子高等師範学校教授家事科主任）本校家政館新築計画あることを聞かれ特に好意を以て雀部教頭、デントン教師と新築計画につき協議、有益なる注意を与へられたり。
1・28 西島富寿子（東京女子高等師範学校生徒監）寄宿舎及び静和館を參觀。
2・3 招待会、府立女子師範、府立第一、第二高女及市立高女に奉職中なる東京及奈良女高師出身の女教師二十名を招き懇談会を開く。雀部教頭より本校教育の特色に就き説明をなし、一同晚餐を共にし、終つて府立第二高女の高橋氏より来会者を代表したる挨拶あり、本校の為応分の援助を与へらるゝことを約せられ、各歎を尽して閉会。

2・13 宮川牧師、朝の礼拝に於て講話。

2・17 重田重一（和歌山県立高女教諭）校舎及び授業を參觀。

2・18 伊庭菊次郎（梅花女学校長）来校、雀部教頭に教務上打合せられたり。

2・20 招待会、視学会議に列席中の府、市、郡視学及び小豆沢女子師範学校長等約二十名を招きデントン宅にて懇談会。先づ原田社長より歓迎の挨拶あり、雀部新教頭を紹介、続いて雀部教頭は欧米各国に於ける女子教育の新風潮より説き起して同志社女学校の特色を説明、新任の挨拶と共に将来の援助を求

め、後簡単なる晚餐を饗し卓上主客の間に種々なる談話交歓、来客を代表したる小豆沢校長の挨拶を以て閉会。

2・26 松本博士来校「日本画分類に就て」例の如き専門学部生徒の為講演。

3・6 参観旅行として来京中の奈良女子高等師範学校教授及び生徒約二十名を招きデントン宅にて茶話会を開き懇談を交へたり。

3・10 松田少佐（砲兵第二十二聯隊）陸軍記念日なりし故少佐を聘し日露戦争に関する記念講話会。

3・13 大多和キヨの特別講義十三日を以て終了。原田校長より謝辞。傍聴生を代表して小豆沢女子師範学校長より挨拶あり。

4・15 大多和清子（本校家政科顧問）来校、専門学部家政科家事科目制定につき協議。

4・30 松本博士、科外講話「日本人の美術趣味」。

5・4 新渡戸博士、朝拝後講演。根本代議士、午前十一時より談話。

5・6 金森通倫、朝拝後講演。

5・10 井深梶之助、朝拝後談話。

5・13 秋山鉄太郎（朝鮮総督府視学官）授業参観。

5・21 松本博士、科外講義「疲労に就て」。

6・7 太田秀穂（朝鮮京城女子高等普通学校長）来校。

6・8 宮川牧師、朝拝後講演「感化の源泉」。

6・9 木村牧師、朝拝後講演。露無牧師講演「神の顕現としての基督」。

- 6・9 職員懇話会、デントン宅にて原田社長の開会の辞に続き露無、安部両牧師、雀部教頭の所感談、終りて一同食卓につき晚餐。
- 6・10 露無牧師、朝拝後講演「救主としての基督」。
- 6・11 武田牧師、朝拝後簡單なる感話。
- 6・19 松本博士、科外講演「生命之危機」。
- 6・26 大多和、専門学部家政科生徒に対する家事上の特別講演。
- 9・9 栗原基（第三高等学校教授）「南洋觀察談」。
- 9・24 松本博士、東京より来校、翌二十五日専門学部生徒の為科外講義「智的才能と遺伝」。
- 10・15 野口英世博士（紐育ロックフェラー研究所）平井博士（京大医科教授）等の案内にて来校、各校舎參觀の後、講堂にて「日米關係及同志社の特色」等に就て一場の講演。
- 10・20 広津藤吉（下関梅花女学校長）来校參觀。
- 10・25 塩谷教授（東京高等師範学校）英語科生徒十六名を引率して来校、特に英語の授業を參觀。
- 10・26 古瀬安俊（文部省）学校衛生視察の為来校。
- 10・30 向齒科医学生、午後七時来校、幻灯を以て齒科衛生に関する講話。
- 11・1 高野重三、特に専門学部生徒の為「生物界に於ける女性の位置」の斬新有益なる講演。
- 11・1 九鬼、河越（奈良女子高等師範学校助教諭）来校。
- 11・2 大塚素、朝拝後満州に関する講話。
- 11・15 山室軍平（救世軍大佐）朝拝後「人生の旅途」講話。

- 11・17 新渡戸博士、朝拝後「友情に就て」の講話。
- 11・18 後藤男爵、夫人令嬢同伴、各館參觀の上教師館にて昼餐の饗応を受けられたり。
- 11・22 男爵高木兼寛博士、衛生に関する講演、終て教師館にて昼餐を饗す。
- 12・1 沢柳博士、婦人の天職に就き講話。
- 12・16 露無牧師、朝拝后感話。
- 12・16 神戸女学院職員生徒約百八十名御所拝観の爲上京の際来校せられ、暫時休憩せられたり。
- 12・17 松本博士、文展に就て講話。
- 12・20 井上秀子（日本女子大学校教授）新築家政館を視察。
- 1・27 バックストン、本校女子青年会の招により来校。上品にして而かも流暢なる日本語にて熱心なる感話を試みられ一同靈雨に浴するを得たり。
- 3・4 ベイレー（米人）朝拝に簡單なる談話。
- 3・9 マクヂユガル女史（英人）印度マドラスに新設せらるゝ基督教各派連合女子大学に校長として赴任の途中来校、朝拝に簡單なる談話。
- 3・10 バックストン、一月以来毎月一回神戸より招き女子青年会及び専門学部生徒の爲講話を囑託することになりしが、二月には十七日、三月には十日に来校あり。
- 4・21 エルキントン、夜幻灯を以て欧州風景を撮影。
- 4・23 メーソン（英人）朝拝後講演。
- 5・3 ミッセス・セベランス（米人）、平岩愼保両氏朝拝後講演。

5・26 バックストン、女子青年会例会にて講話。

5・27 バックストン、朝拝後講演。

6・19 デラ・ファイユ伯（白国公使）当校主催の白国同情慈善音楽会出席の為来校。朝拝後約二時間に互り英語にて「独軍の暴虐と白国民の窮状」につき詳細に説明せられ且つ之に對する日本人の同情に向つて深厚なる感謝の意を表せられたり。中瀬古教授通訳。

6・25 カスチユル（神戸駐在白国領事）白国同情慈善音楽会の報告会、原田社長挨拶、収入全部（金一、一二九円八錢）を列席のカ氏に贈呈、同氏は英語にて謝辞。

7・15 ヘーズ（米国ノースウエスタン大学教授）目下新築中の専門学部家政館定礎式で演説、祈祷。原田社長の祈祷にて式を閉ず。

9・25 ミス・テラー（米国基督教青年会幹事）朝拝後簡単な女子教育談。

10・6 バックストン「聖書講演」。

10・6 ギーテリツヒ（米国宣教師）夫妻来校。

10・11 ヤング（英国ケンブリッジ大学教授）校舎及授業參觀。

10・18 シカゴ大学及早稲田大学の野球選手及監督、教授等約四十名来校。各校舍參觀の後、校庭にて互に校歌を唱へ友情を交換せり。

〈大正五（一九一六）年〉

1・22 松本博士、科外講演「優種学ユウシュウガクに就て」。

1・25 岡本米造、講話「母の愛」。

- 2・4 永井直好（青森県立弘前高女）参観。
- 2・18 枝吉鶴子（奈良県立桜井高女教諭）参観。
- 2・25 大江スミ子（東京女子高等師範学校教授）普通学部生徒に対して家事上の心得に就ての講話。
- 3・3 畠田繁太郎（大阪府立市岡高女校長）参観。
- 3・4 松本博士、専門学部科外講演「筆蹟鑑賞の心理」。
- 3・6 釜瀬新平（私立九州高女校長）、堤コト（滋賀県女子師範学校教諭）参観。
- 3・10 山縣大佐、朝拝後、陸軍記念日に付講話。
- 3・18 間瀬八重（岡山県女子師範学校教諭）来校（5・3専門学部家政科に新任教授に着任）。
- 4・5 松浦政泰（日本女子大学校教授）来校。
- 4・12 大多和キヨ（本校家事顧問）来校校舎を参観。
- 4・14 三宅驥一、朝拝後「独逸人に就て」其所感を述べられたり。
- 4・24 伊吹岩五郎（岡山県高梁町私立順正高女校長）生徒三十名を引率して御所拝観の序を以て来校。
- 4・27 高木千応（福岡県立小倉高女校長）参観。
- 4・28 井上たい（岡山県井原町立高女教諭）参観。
- 5・15 大村忠二郎（大阪府立清水谷高女校長）授業又は校舎を参観。
- 5・21 松本博士、科外講義「疲労に就て」。
- 6・7 太田秀穂（朝鮮京城女子高等普通学校校長）来校。
- 6・8 宮川牧師、朝拝後講話「感化の源泉」。

- 6・9 露無牧師、午後〇時三十分より講話「神の顕現としての基督」。
- 6・10 露無牧師、朝拝後講話。
- 6・11 武田牧師、朝拝後、簡単な感話。
- 6・19 安部牧師、専門学部生徒の為、山上垂訓に関する特別講話。
- 6・21 松扉得悟（和歌山県東牟婁郡立高女校長）来校。
- 6・22 松本博士、課外講演「統計上より見たる抜群の女子」。
- 8・24 井上忠次（愛知県立第一中学校教諭）来校の上校舎を參觀。
- 8・26 石橋臥波（日本女子教育会主事）来校。
- 8・27 下田ノブ子（佐賀県藤津郡立鹿島高女教諭）、神田静尾（京都府立第二高女教諭）来校。
- 9・11 向軍治（慶応大学教授）始業式後、羅馬字に関する特別講演。
- 9・11 本田ヤヨヒ（京都府立師範学校教諭）来校。
- 9・19 青木兒、朝拝後講話。
- 10・6 露無文治、朝拝後講話。
- 10・7 杉田潮、朝拝後講話。
- 10・9 山本忠美、朝拝後講話。
- 10・23 鳥居規知（大阪府立泉南高女校長）来校。
- 10・24 渡辺春藏（朝鮮平壤女子高等普通学校長）来校。
- 10・31 新渡戸博士、天長節祝賀式後「国家に対する真心」に就ての講話。

- 11・1 安部磯雄、朝拝後「婦人の教育」に関する講話。
- 11・1 吉野作造（東京帝国大学法科教授）来校。
- 11・10 山室軍平、朝拝後「神と人との関係」に就き講話。
- 11・10 都田忠次郎（鳥取県立鳥取高女校長）来校。
- 11・14 藤井利誉（東京女子高等師範学校教授）来校の上校舎及び授業を参観。
- 11・17 内ヶ崎作三郎、朝拝後「欧州戦争の女子に及ぼす影響」講話。
- 11・18 増沢淑（京都府加佐郡立高女校長）来校。
- 12・4 河井道、朝拝後「女子の修養」講話。
- 12・4 滝川規一（第三高等学校教授）、青木道（鳥取県立浜田高女校長）来校。
- 12・9 松本博士、文展に出たる日本画に関する批評の講話。
- 2・3 バックストン、午前八時半より感話。
- 2・16 セーラー（米国コロンビア大学教授）朝拝後、简单なる感話。
- 5・4 カンタラージャ（印度マイソール国王義弟）随行員と共に来校。校舎参観の後、講堂にて英語を以て印度の風俗に関する一場の講話。終りて教師館にて茶菓を饗す。
- 5・26 バックストン、女子青年会例会にて講話。
- 5・27 バックストン、朝拝後講話。
- 7・1 コーホイド（北米カリフォルニア大学教授）来校。
- 9・28 スノー嬢（米人）及フランキン、外二名参観。

- 11・18 ウキリアム、パーカー、関西保母会出席者約三十名来校。
- 11・30 メーナード・ウイリアム、朝拝後「女権拡張と女子の特性」の講話。
- 12・6 ダルド及び夫人来校。

〈大正六（一九一七）年〉

- 1・12 松本博士、午前八時半より約二時間「信仰の心理」と題する科外講演。
- 2・2 松本雅太郎（朝鮮京城淑明女子高等普通学校幹事）来校。
- 2・3 松本雅太郎、朝拝後、朝鮮の女子教育に關し講話。
- 2・10 長谷場チキ子未亡人、来校。
- 3・3 立野和子（奈良県立高女教諭）參觀。
- 3・20 新渡戸博士、午後一時半より修養に關する有益なる講話。
- 3・30 上田曦（鹿児島県立女子師範学校教諭）来校。
- 4・13 富永登代子（福岡県糸島郡立枝芸女学校教諭）各部を參觀。
- 4・24 藤村トヨ（私立東京音楽体操学校長）朝拝後一時間に亘る講話。
- 5・7 炭谷小梅、朝拝後簡單なる講話。
- 5・7 村田勤、来校。
- 5・10 岡田操子、来校。
- 5・18 栗原文学士（三高教授）英文科三年生の為、英文学に關する特別講演、以後引続一学期間毎週一回講演せらるゝこと、なりたり。

- 5・22 大村芳樹（大阪府女子師範学校長）来校。
- 5・31 上田駿一郎（朝鮮総督府視学官）来校。
- 6・11 牧瀬五一郎（文部省参事官）来校。
- 6・18 村尾愷太郎（文部属）来校。
- 7・2 松波博士、女子教育に関する講話。
- 9・24 竹下英一（大阪市）来校。
- 9・24 同志社中学に於ける市内中等学校理化担当教師協議会出席者十二名は福井教師の案内にて来校、普通学部及家政科理化教室を視察。
- 10・20 村島利平（奈良女子高等師範学校教授）来校。
- 10・26 佐伯教授、女子青年会主催にて「宗教衛生」に就ての講演。
- 11・17 広岡浅子、講話「基督教と婦人」。
- 11・27 寺田喜治郎（福岡県立小倉高女教諭）来校。
- 11・29 山室軍平、同志社創立記念式、女学校礼拝堂に於て講話。
- 11・30 茂原茂（千葉県立東金高女校長）来校。
- 1・18 スチンソン嬢（飛行家）朝拝後、自己の飛行機術練習の目的に就き講話。
- 2・6 アルワード嬢、ポーター嬢（米人）は城戸順子と共に来校。
- 3・1 ブリヂマン夫人（故デビス博士の令嬢）朝拝後、亜米利加土人の生活及其教化に関する講話。
- 4・19 ツウイング（米人）講話。

- 4・20 アフォルター(米人) 来校。
 - 5・5 ハンシヨフ夫人(露国陸軍大佐) 来校。本校職員生徒の為独唱を試みられたり。
 - 5・7 サルター(米人) 来校。
 - 5・9 ポエラー、チエス(米人) 二氏来校。
 - 5・15 ブライト、ケネデー、ホイチアー(米人) 三氏来校參觀せらる。
 - 5・26 マクルーア(北米合衆国著述家) 来校。
 - 6・16 湯松(中華民國湖南公立商業専門学校長) 来校。
 - 6・18 ジョンソン嬢(印度在住米国宣教師) 朝拝後、印度人の風俗に関する講話。
 - 7・10 朱友漁(中国聖約幹大学教員) 来校。
 - 9・15 バアニング(在印度宣教師) 參觀。
 - 11・6 バーカー夫人(米国ミネソタ州デールズ市) 来校、平安寮に暫時休憩の上校内を參觀。
- 〈大正七(一九一八)年〉
- 1・17 露無牧師、朝拝後講話。
 - 3・1 大森房吉博士(地震学の泰斗) 朝拝後「本邦の地震」に関する二時間に亘る講話。
 - 3・15 新原俊秀(前神奈川県立高女校長、同志社校友) 參觀。
 - 4・20 千葉勇五郎(嘗て本校教頭) 女学校創立第四十一記念式演説。
 - 4・26 田村作太郎(実業之日本社より派遣の京都第二高等小学校長) 米国視察談、引続き職員一同と懇談会。
 - 5・9 鈴木(日本歯科医学専門学校教授)、新井(同) 歯の衛生に関する講演。

- 6・1 第五回連合庭球会、神戸女学院は木村教頭十二名の選手を引率。梅花女学校は伊庭校長、数名の職員と共に十二名の選手を引率し来校。一同は本校職員と共に午餐を共にし終えて午後一時半より競技。¹⁵⁾
- 6・5 三谷学監（東京女子学院）朝拝後、約一時間の講話。
- 6・26 北村最（広島県深安郡春日尋常高等小学校長）参観。
- 6・28 矢口親六（京都府南桑田郡立高女校長）、藤山豊（天田郡立高女校長）参観。
- 7・9 鈴木歌子（学習院教授）参観。
- 9・13 浜田耕作（帝大文科教授文学博士）歴史に関する講話ありて専門学部生徒聴講。
- 9・19 青柳栄司（京都帝国大学）朝拝後、生徒一般の為め欧米視察談。
- 10・12 松本雅太郎（朝鮮淑明女子高等普通学校幹事）、渡瀬主一郎（鹿兒島組合教会牧師）参観。
- 10・31 朝河貫一（イェール大学助教授）天長節式後、五年級以上に対し講演「美はしき霊」。
- 11・30 木村清松、朝、講演。
- 12・4 大石和太郎（府立第一高女校長）参観。
- 1・11 ベラー、朝拝後、目下亜布利加の状況を話す。
- 3・20 マクドナルド（加奈陀宣教師）同夫人参観。
- 5・27 プレスデル（カリホルニヤ州ポナモ大学総長）同夫人参観。
- 5・24 ベル（米国伝道会社副幹事）参観。
- 6・8 ローランド博士（札幌）朝拝後講話。
- 7・2 ミセス・エツデイ（米国青年会幹事）朝拝後約一時間の講話。

11・25 ミス・フラーブス（英国婦人）朝拝に講演。

（大正八（一九一九）年）

- 1・14 占野靖男（佐賀県藤津郡立鹿島高女校長）来訪。
- 1・23 新島先生記念会、新島未亡人の来臨を請ひ其手記に成れる「先生病状日誌」を朗読して当時を偲べり。
- 2・6 海老名都女史、夫君と仏国へ渡航に就き其途次母校に立寄られ、生徒一同に対し一場の講話。
- 2・7 表甚六（広島県立福山高女校長）来訪。
- 3・10 板坂省吾（第十六師団第三八聯隊付歩兵少佐）を聘し陸軍記念日講演会。
- 4・22 芦田教授（神学部長）科外講演「デイウエー氏のプラグマチズム学説」。
- 5・12 横井藤四郎（国会議員）来校。
- 5・14 秋艸とく、松原よね（府立第一高女教諭）来校校舎参観。
- 5・21 富永徳磨、英文科及家政科生徒の為宗教講演「神の内在」。
- 5・22 富永徳磨、朝拝後全校生徒の為講演「貴き自覚」。
- 5・28 吉田健介（舞鶴鎮守府駆逐艦長海軍大尉）を聘し近世海軍の武器に就き講演。
- 6・6 東本願寺婦人法話会員、井波潜影（京都教務所長）等二十三名来校、本校々長より新島先生の事跡に
関する講演を聴き遍く校内を参観。
- 6・25 江良千代子外数名を聘し純日本音楽大会開催。アイクハイム御夫妻及びミス・クラブを招待して謝意
を表す。
- 6・26 渡辺常子（米国より新婦朝）朝会に於て一場の視察談。

- 8・15 大久保忠臣（上海日本人基督教青年会）来校参観。
- 8・17 室富新輔（大阪府下樟蔭高女教諭）来校参観。
- 8・29 淵沢能恵子（朝鮮京城淑明女子高等普通学校学監）来校。
- 9・26 和久山きえ子、来訪。
- 10・13 山室軍平、朝第一限講演「神我と偕に在り」。
- 10・14 岡本良馬（高知県立高女校長）来校参観。
- 10・22 亀岡啓二（京都視学）来校。
- 11・1 大橋房子、朝拝後講話。
- 3・8 松友（支那南軍大隊長付）を聘し周瑾女史に関する講話。
- 4・4 コーヴァー（チェックスロバック民族牧師）同民族兵慰問の途上来訪。
- 4・16 デイウィー博士（コロムビア大学教授）夫妻、水崎基一の案内によりて来訪、昼餐、同氏の帝国大学に於ける二回の講演には英文科三年生に聴講を許されたり。
- 4・16 ルース・スポールデング嬢（米国華盛頓府の音楽家）当校に立寄られ教師館内に数日滞留。本年度英文科卒業生及第三学年在学学生等の主催にて三条青年会館に於て演奏会。
- 4・17 ファーネス女史（米国ヴァツサー女子大学天文学教授）全校生徒の為通俗天文学講演。
- 4・29 ロバート・リンチ（桑港商業会議所副会頭）朝「国際親善」に關し課外講演。
- 5・13 ミス・スタッフォード、ミス・ウォーカー、ミス・スコット、ミス・マツケリブ、ミス・ホース（米国女子青年会派遣員）五ヶ国に於ける社会事情調査の為来遊。同志社男女諸学校の教職員及家族

を招待して歓迎懇談会。

5・15 キヤムベル（北印度宣教師）夫妻及マンセル夫人外二名来校。

5・16 ツウイング（在布哇宣教師）来校。

5・16 スタッフフォード女史（米国女子青年会日本視察員）「米国に於ける愛国娘子会の趣旨」に関する課外講演。

5・ 支那金陵大学職員生徒三十一名は同校教授サムプル氏等に引率せられて来校、家政館食堂に於て中村総長以下同志社教職員生徒等有志の歓迎を受けたり。

5・31 モリス（米国全権大使）本校にて開催中の市内中等学校英語教員会に臨場、一場の講演。

6・19 バットン博士（全米基督教諸教会を代表して来朝）教師館にて歓迎会。終て館前芝生の上に整列したる寄宿生一同の為に一場の講演を請へり。

7・7 A・S・パーウエル（米国シアトルの紳士）及令嬢歓迎会。

7・14 ゲッチー女史（仏国に於て戦事負傷者の為に訓盲事業に従事）第一学期終了式後講演。

9・14 アルバート・ルベル（和蘭国旅行家）、グレイビン女史（露国博言学者）来校。

10・14 コールダー女史（米国伝道会社婦人部派遣員）朝拝に於て一場の挨拶。

11・7 ヒギンス女史（英国救世軍派遣）朝拝後講話。

11・7 ウーズ博士（ボストン大学植民事業主幹、米国社会事業協会議長）同志社にて講演。その後同博士夫人及安藤謙介（京都市長）同夫人を招待して家政館食堂に於て午餐を供す。

11・21 ホフマイヤ（亜刺比亜宣教師）、ミス・スカッター（印度宣教師）一行来校。

12・4 マッコイ嬢（ワイラデルフィア府）等一行来校。

12・8 ライト夫人（ボストン府）来校。

12・10 ギャムブル（シンシナ府）令息来校。

（大正九（一九二〇）年）

2・12 米沢尚三、生徒の為に講話。

2・16 市村与一（名古屋金城女学校長）、高橋芳之助（宇治郡視学）来訪。

2・17 安永重政（愛媛県立松山高女学校長）来訪。

3・4 大野倉之助（奈良県桜井高女学校長）来訪。

3・16 海老名みや子、朝拝後、基督教講話。

3・18 清水安三、朝拝後、支那に関する宗教所感の講話。

4・17 綱島牧師、朝拝後、故新島先生の御精神より同志社の現状に就て講話。

4・20 内田郁子、良人老母令嬢と共に帰朝来校せられ、七月二十二日出発帰米せらる。

5・10 松浦嶺子（故政泰夫人）来校。

5・18 荒瀬カツ子（明治二十九年師範科卒、日向国高鍋町皇神高女）来訪。

5・26 小矢野（藤田）節代、米国より帰朝来校。

5・6 広津藤吉（下関梅光女学校長）、伊吹岩五郎（備中高梁順正女学校長）、松本伊太郎（丹波船井郡視学）、森新之助（丹波園部尋常高等小学校長）、古川覚太郎及蜂谷麟子（東京実践女学校教諭）、中川脩一（府下熊野郡視学）、栗田ともゑ子（秋田県船越町小学校訓導）、阿部泰作（宮城県角田高女校

長)、某氏(メソポタミア州子ストリア牧師)、ホームス(同志社新理事)等は女学校を參觀せられたり。

- 6・11、12 工藤千里、女学校裁縫室に於て同窓会京都支部主催、工藤式かけつき法講習。
- 7・7 阿部泰作(宮城県伊具郡立角田高女校長) 来校。
- 9・25 田中登子、皆川静枝子(福岡県田川郡金田尋常高等小学校訓導) 来校。
- 10・7 始関俊作(府立第二高女教諭) 来校。
- 10・25 奥村多喜衛、日米問題と布哇の現状に就き講話。
- 11・18 畠中博牧師、朝拝に「朝鮮伝道の急務并に支那飢饉の概況」に付講話。
- 4・14 王立明女史(中華民国基督教女子節制会幹事) 朝拝後一場の感話。
- 4・19 マツコルミック嬢(米国) 朝拝後、欧州大戦に於ける婦人の事業に付講話。
- 5・8 ヴァンダーリップ(米国実業団長) 夫人、朝来訪、十一時より「女子教育の必要及女権拡張の意義」に就て講演。
- 5・10 マコズランド嬢(米国バツフェロー市) 数分間講話。
- 5・11 プリムプトン(アーモスト大学々生) 数分間講話。
- 6・17 中華民国江蘇州師範学堂生徒三十二名、藤森(京都府学務課)の案内にて来校、詳敷校内參觀。家政館にて中食をなし多大の満足を表して辞し去られたり。
- 8・24 世界日曜学校大会参列の為来朝したる米国人三十余名の一団由来訪、第一回。
- 9・14 世界日曜学校大会参列の第二回団員八名来訪。

- 9・ミス・スラッター（世界日曜学校大会列席者中の雄弁家）午前十一時より生徒一般へ「十年後の将来」と題する修養上の講話あり。次にハウジンガー嬢の独唱あり。
- 9・18 ラッセル（米國オーチス・エレベーター会社技師長）来訪。朝会の席上一場の講演。
- 10・19 ビックリー（シンガポール・メンヂスト監督ビショップ）来訪。
- 10・26 ハワード（アルゼンチン共和國宣教師）「正実の行為」に就き講話。
- 11・6 ミス・エドガー（加奈陀）「奮闘努力」に付講話。

〈大正二〇（一九二一）年〉

- 1・17 山野上長治、松本雅太郎（朝鮮京城私立淑明女子高等普通学校）来校。
- 2・8 西原光太郎（京都府北桑田郡長）来校。
- 2・9 京都市内私立女学校長会議、八私立女学校代表者の外、伊庭（大阪梅花女学校長）も出席。協議後一同校舎參觀の上、教師館にて夕餐を共にし、其後藤森（京都府視学）来校、学事上の打合。
- 2・16 片川悦藏（岡山県津山高女校長）来校。
- 2・25 井吹岩五郎（岡山県高梁順正高女校長）来校。
- 3・10 第四六学年卒業式、馬淵鋭太郎（府知事）祝辞、山口金作（平安教会牧師）。
- 3・28 後藤夏子（神戸市立高女教諭）、鈴木とみ子（京都市立高女教諭）来校。
- 3・ 松岡筆子、三月米國（サンフランシスコ）より帰朝、来校せらる。
- 3・ 三浦みき、三月米國より帰朝、子達同伴来校数日滞在。
- 春 津村富美子、三十年振りにて今春来校せらる。

- 4・ 荒瀬かつ子（大分県高鍋実科高女教諭）四月令嬢和子入学のため来校せらる。
- 4・29 須藤甚之助（大阪市立実践高女校長）来校。
- 5・10 近藤九一郎（兵庫県水上郡立高女校長）、森山辰野助（島根県女子師範学校長）来校。
- 5・27 木村清松、伝道説教、朝全校生徒の為に宗教講演。
- 5・29 木村清松、寄宿生の為に午後二時宗教講演。
- 5・30 木村清松、五年生の為に午前十一時特別講演を試みられ、多大の感動を与へられたり。
- 6・4 曾我部静子（卒業生、東京音楽学校在学中）京都に催されたる同校大音楽会出席の序を以て学校内に一泊。朝拝の時を以て全校の為に独唱。
- 7・12 江度哲太郎（神戸市立女子商業学校長）来校。
- 7・16、18 松本雅太郎（淑明女子高等普通学校幹事）同校朝鮮人女教師四名を率ゐて来校。寄宿舎内に滞在の上市内見学。
- 8・12 中野実生（岡山県第二中学校教諭）来校。
- 9・21 加藤直士（大阪毎日新聞記者）東宮殿上欧州御見学に関する講話。
- 9・29 木村清松、朝拝後講話。
- 10・1 松井文弥、朝拝後講話。
- 10・10 末広重雄（京都帝国大学教授法学博士）特別講演、専門学部生徒一般のため十日より毎週一回宛戦後の国際問題に付き講演あり（11・7）。
- 11・2 千葉豊治（日米問題調査会）科外講演「婦人の国際的奉仕」。

- 11・14 広島女学校高等部生徒五名は教員林きく子の引率の下に校内を参観。
- 12・1 武田牧師（彦根基督教会）朝拝に講話。
- 4・29 ハウス（支那広東クリスチャン大学化学教授）来校。
- 6・7 間榮生（支那江蘇教育庁第二科員）、張弘業（同省第七師範校長）、張倚（同省第十中学校長）等は帝國大学々生孫徳修の案内にて来校。
- 6・23、24 リチャード夫妻（米國トリード市）両日朝拝の後、パレスタイン、印度、ビルマ等の旅行談。
- 7・15 ベンフィールド嬢、オルルルク嬢（シアトル市高等女学校教員）来校。
- 7・18 米國名士歡迎、クロージア及夫人（数ヶ月来支那に滞在視察研究、帰米の途次京都に立寄られたる）、ピアース及夫人（病理学者、北京に於けるロックフェラー医科大学開校式挙行為東洋来訪中）招請し、教師館にて午餐会、其他の来賓は藤浪鑑（京都帝國大学教授）及夫人、中島玉吉（同法学博士）、坂口昂（文学博士）、河村博士（医学専門学校教授）等なりき。
- 8・20 張膺震、尹内燮（徽文高等普通学校教員）乗祚（朝鮮中央基督教青年会社支部幹事）来校。
- 9・21 ダッチャー（ウエスレイヤン大学教授）朝拝後講話。
- 10・5 バイダ女史（アンサス大学生理学教授）科外講演「社会衛生に於ける女子の務めに就て」。
- 10・6 ヴェール女史（米國ミルズ・コレヂ教授）教師午餐会の席上一場の挨拶を述べられたり。
- 10・10 ドクトル・セーピン女史、朝拝後「ラジウムの発見に就て」科外講話。
- 12・12 ゼームス夫妻（ゼームス館等寄贈）及一行。ゼームス館前庭に同志社男女学生職員列席盛大なる歓迎会を開き、終りて記念撮影。12・14 京都駅発にて神戸へ。女学校職員二十九名、生徒四十四名は見送

りのため同地へ向ひ、ゼームス氏所有快走艇アロハ号上にて茶菓の饗応を受く。

〈大正一一（一九二二）年〉

- 1・21 賀川豊彦、宗教講話。
- 2・11 坪井善藏（陸軍歩兵少佐）紀元節祝賀式後、山県元帥につき講話。
- 2・20 中村久栄子、生活改善整容について講演。
- 2・21 宇佐川政輝、世界一周と国家観に就き講演。
- 3・1 野村文応、中村秀光（親和高女教師）来校。
- 3・2 奈良女子高等師範学校四学年生徒文科理科家政科六十八名は木下教授外二名の教師引率の下に本校參觀。

- 3・6 田中諦心（親和高女教師）来校。
- 3・16 神田順子（東京女子高等師範学校教授）、矢口豊（同文部属）来校。
- 3・23 巖谷小波、第三期の職員慰勞会に突然来会せられ牛に関する有益なる講話あり。
- 3・28 東京府第三高女生徒六十八名は同校教諭和田精一と共に來觀。
- 5・13 江馬務、生徒全体のために葵祭に関する詳細なる科外講話。
- 5・25 黒田正利、「文学に就て」講演。
- 6・2 高野みちゑ子（尚綱女学校教員）、沼沢龍雄（女子学習院教授）来校。
- 6・5 山本一清、「今日の遊星界」講演。
- 10・1 長谷川（舞鶴高女教師、本校英文科卒業生）同校寄宿生二十四名引率来校、各教室參觀、家政館にて

休憩、懇談の上帰鶴せり。

10・2 岡崎俊雄（室蘭組合教会牧師）参観。

10・13 額賀牧師（東京番町教会）朝拝後、信仰上の講話。

11・24 塚本はま子、科外講演「家庭経済に就て」。

12・7 加藤とく子（赤穂高女教諭）来観。

2・6 H・M・ゴーエン博士、科外講演「東洋と西洋」。

2・8 ジョッフ元帥、同志社大校庭にて開催の歓迎会に女学校よりも職員生徒一同参列、女学校より元帥及夫人に花束を贈呈せり、尚二月十五日には同元帥一行の退京を一同烏丸通三条下る東側にて御見送り。

3・15 岡安慶輔、崔在鶴、外一名（海州メソヂスト教会牧師）来校。

5・4 北京女子高等師範学校生徒十九名は教務主任李貽燕に引率せられ見学のため来京、家政館に滞在。

十一日朝拝の後講演又は詩文を朗読し満堂の喝采を博せり、一、紹介之辞、二、中華国歌、三、中華近日文学ノ趨勢（黄英）、四、浪淘紗詞（羅静軒）、五、唐詩（張雪聰）、六、赤壁賦（呉琬）、七、満江紅（銭用和）、八、虞美人（同）、九、長恨歌（種俊英）、十、閉会。

6・2 林礪儒（北京高等師範学校教授）同校学生二十六名引率来観。

6・13 黄伝霖（支那済国江西宜黄）は中華民國武昌高師学堂畢業生三十人引率参観。

12・2 葉沛清（農商部三等獎章、安徽省長公署派赴日本調査、教育実業委員）、孫徳修、通訳（京都帝国大学経済学部学生）来校。

- 12・5 ゴドヴキスキー（世界的ピアニスト）午後一時女学校雨天体操場にて演奏、生徒一同、来賓二百名。
 デントン方に一宿翌朝神戸解纜支那へ向はれた。
- 12・6 H・H・ゴーエン博士（ワシントン大学教授）来校。公会堂に於て大学生及女学校専門学部生徒の為
 講演「東洋と西洋」
- 〈大正二二（一九三三）年〉
- 1・17 省部顕宜（大阪府立大手前高女校長）来校。
- 1・18 住友縫之助（徳島県立撫養高女校長）来校。
- 1・19 樋口清二（愛媛県立東宇和高女校長）来校。
- 1・24 山室軍平、朝拝講話。
- 2・28 渡辺常子（婦人伝道会委員長）朝拝後、修養談。
- 5・14 大橋講師、朝拝後、牛痘の発見者ゼンナーが其子息に種痘を試験した記念日なので其概要に就て講話。
- 9・17 武田五一博士、午前八時より震災と建築に関し科外講演。
- 10・26 大阪大手前高女高等科生徒六十七名は雀部校長に引率せられて来校、校内參觀の上、松田校長山中主
 任と面談して帰校。
- 11・16 長谷川敏（神戸雲内教会牧師）朝拝に講話。
- 11・20 河井道子（日本女子青年会総幹事）講話。
- 11・28 国府慎一郎（文部省）、松田佳八（宮崎県飨肥郡立高女）来校。
- 11・30 山本義一（長野県立長野高女校長）来校。

12・11 桜木安次郎（名古屋市立第二高女校長）来校。

来校者（日付なし）安井哲子（東京女子大学々長）、高田テツ子（大分県立高田高女教諭）、和田信一（大分県立大分高女校長）、町野良（三重県立阿山高女）、磯村タツエ子（大阪市北区下福島裁縫学校教諭）、

渋谷八九郎（同）、上田忠二（大連市立高女校長）、岡安慶輔（日本メソヂスト平壤教会）。

1・17 雅楽徳、羅運炎、R. Yeo（東亜美以美教会七十五週記念総幹事）来校。

3・6 S・L・ギューリック博士、午前八時より女学校に於て「平和主義」に就き科外講演。九時より公会堂に於て大学生及女学校専門学部学生のため「戦争撲滅の新運動」と題する講演。

10・6 ライト（米国盲啞教育家、アムアースト大学出身者にして現総長海老名就任式にも列席）午前八時より盲啞教育につき講話。

11・20 バーネット夫妻（東京米国大使館付大佐）朝拝に出席。数日デントン宅に滞在中同志社女学校内動物愛護会を組織せられ同会に五十円を寄附。

来校者（日付なし）張定鈞（中華民國江西直振南南昌）、金弘植（耶蘇教美監理会牧師）、金聚成（平壤私立崇徳学校監）。

〈大正二三（一九二四）年〉

1・10 三溝升一（沖繩県女子師範学校長、沖繩県立高女校長）来校。

1・27 松尾京子、牧村里恵子（平安高女教師）来校、数学の授業参観。田島教恵（淑女高女校長）来校。

1・28 樋口清二（愛媛県立東宇和高女校長）来校。

1・30 垂水繁光（愛媛県立東宇和高女教諭）体操の授業参観。

- 1・31 小山善太郎の講演会。
- 1・ 新渡戸稲造（国際聯盟事務次長）本校講堂に於て市婦人連合会主催講演。
- 3・4 武用種吉（京都市立第二高女校長）朝拝後科外講演「欧州漫遊談」。
- 7・17 奥太一郎（東京女子大学教授）を聘して十七日より二日間ダルトンプランの科外講演。
- 9・23 久布白落実（婦人矯風会）講演。
- 9・24 木村清松、講演。
- 9・25 和田信一（東京城南教会）講話。
- 10・2 渡部守成（奉天基督教会）講話。
- 10・6 林福子、講演。
- 10・16 矢口文部属（文部省）来校、特に家事科の設備を視察。
- 10・20 三条官内事務官其他関係諸官、十二月八日皇后陛下学事奨励の御思召を以て本校行啓の御沙汰あり、校内の各教室視察、種々打合せに来校。
- 10・20 服部他之助、高島彝子（学習院教授）参観。
- 10・21 服部他之助、「乃木將軍の事跡」に就て科外講演。
- 10・27 長坂鑑次郎（神戸女学院教頭）修養に就て講演。
- 11・3 葉山五郎作（島根県立今市高女教諭）参観。
- 11・4 原松太（西南女学院主事）参観。
- 11・5 野崎泰秀（学習院教授）参観。

12・8 貞明皇后行啓、大森皇后大夫、女官、府知事、高等官、其他を従へさせられ莊嚴なる警備のうちに御台臨。外来参列同窓会員六十一名(愛知奈良滋賀和歌山大阪兵庫京都)。

1・25 ルーズヴェルト夫人、科外講演「社会奉仕」通訳岡戸教授、其後一同教師館にて懇談ありたり。

6・25 北米大学生一行十三人は実地見学のため参観。

7・19 米国ボモナ大学外七大学生日本觀光団一行は同志社参観後、女学校家政館にて午餐の饗応を受けたり。

9・18 朝拝にポーター博士夫人の紹介後、ミセス・アンダーズ(英国)「神に関する観念」に付き科外講談、

尚九月は組合教会総会を折として滞京中の諸氏に講話を乞ひたり。

10・9 マキーネン(万国基督教会同盟会)講話。

11・11 陳達(湖北学生視察団)他生徒九名参観。

〈大正一四(一九二五)年〉

2・15 三島栄助、講演「消費節約と乃木大将夫人」。

3・6 松山義和(文部属)英文科及家政科卒業試験臨検の為来校。

3・17 妹尾盛親(長野県松本高女校長)来訪。

4・24 津曲貞助(私立鹿兒島女学校々主)来年入学者の件にて来校。

5・7 伊庭菊次郎(梅花女学校長)同校専門部上級生十名を率いて来校授業を参観。

5・9 今村寿々代(東洋英和女学校教員)外一名来校授業参観。

5・12 田中タネ、豊崎ナラエ(徳島県女子師範学校、徳島県立徳島高女教諭)家政科の設備及授業を参観。

前田恒治(静岡県女子師範学校長)教員聘用の件にて来校。

- 5・26 長尾政之助（新潟県立長岡高女教諭）授業参観。
- 6・13 青柳栄司工学博士、午前七時四十五分より「禁酒に就て」科外講演。
- 6・17 松浦有志太郎博士、朝拝後「禁酒に就て」科外講演。
- 6・22 家政科三年、午後一時より酒井氏より料理の講習を受けた。
- 11・9、10 賀川豊彦、兩日講演。
- 11・11 佐藤京橘（愛媛県立東宇和高女校長）参観。
- 11・12 岡部貞三郎（北海道庁立釧路高女校長）参観。
- 11・16 牛島仰（熊本県立松橋高女校長）参観。
- 11・ 杉浦卯三（広島高等師範学校教諭）、掛（地方視学）、渡辺（衛生主任）、竹内（京都師範教諭）等来校、本校初鹿野教諭の体操教授を参観午餐を共にせり。
- 12・3 広羽武雄（新潟県立柏崎高女校長）参観。
- 12・4 大森実（福岡県立福岡高女校長）参観。
- 12・5 今井熊太郎（女子学習院教授）参観。
- 12・24 教職員午餐会、寄宿舎食堂、大沢善助、大沢徳太郎夫妻を招待し善助翁に寄宿舎寄附に対する感謝の意を表す。徳太郎氏よりは欧米漫遊談ことにプリンプトン大学の近況を聞く。
- 4・24 米国出生日本人学生十一名、安孫子女史（日米新聞社）に引率せられ来校参観。
- 5・6 バンクロフト（米国大使）本校講堂で教育に関する講演。会する者同志社教授学生生徒及当校職員生徒千有余名。終つて後家政館で茶話会。

6・19 Derrow (アルトの名手) 放課後の音楽会で独唱。

〈大正二五(一九二六)年〉

2・16 梅田シン(浜松市誠心高女教諭) 参観。

2・20 平松菊郎(岡山県笠岡高女教諭) 参観。

3・3 岩谷シゲ、武藤道子(岐阜女子師範学校教諭) 参観。

5・19 金沢市北陸女学校長外教員一名、生徒四十六名は朝拝に列席後校内を参観。

11・7 村山威一郎(静岡県糸島高女校長) 同校生徒引率の上来校。

11・17 高倉徳太郎、講演。

11・29 吉場ノブ(学習院教授) 専門学部来観。

5・1 支那南京女子専門大学教授来観。

5・21 ゼファルソン(米人、博士) 来校一場の講演。

6・3 ガウアリヨフ、女学校講堂に聘して午後四時よりピアノ独奏会。

11・9 ミセス・チゾム(米国海上大学) 参観。

11・19 ネビイル(駐日米国総領事) 夫妻参観。

11・24 アトウット博士(米国クラーク大学総長) 夫妻、クック博士(ハワイ博物館) 夫妻、アダムス(カナ

ダ、マクギル大学総長) 夫妻等一行参観。

11・25 ジョンソン(米国プリンストン大学哲学教授) 夫人、ミス・ハミルトン(オハイオ州立大学) 等来観。

むすび

明治大正期の同志社女学校への来校者リストを作成してきて、この学校がキリスト教主義、国際主義を校是として歩んだことが、この面からも明らかである。創立期の地域・京都府との緊張関係が薄れてきて、それとは無関係に絆を築く要素となっていたと観てよい。

卒業生の寄宿舎への来泊は全てを拾うことが出来なかったが、母校との断ち難い絆は『期報』の至る所にみられる。夕刻のみならず夜七時からの講演、行事などは寄宿生が主であってこそ可能であっただろう。

姉妹校神戸女学院、梅花女学校を越えて、ほぼ全国から公私立高等女学校、女子師範学校からの来校参観があったのは、明治時代の地方女学校の少なさ、大正時代には女子専門学校は地方にはほとんど存在しなかったこともあった。同志社女学校専門学部が地方からの多くの入学生を迎えた要因でもあるが、新たな交流形成と見ることが出来る。

外国人来校者は勿論「同志社」であると同時に「京都」という条件、例えば京都での国際会議参加の機会、あるいは京都旅行の機会という場合も少なくなかった。それにしても現在では想像できない多様な来訪者があった。リストにしばしば登場する校内のデントン邸に関してF・B・クラップに依れば、「日本人のゲストが当然圧倒的に多かったが、京都に住んだことのある西洋人のほとんどは、少なくとも一回は、あるいは何回も彼女の食卓のゲストになった（「延べにすると」数百人というより数千人の旅行者が彼女の家でもてなしを受けた。ゲストブックとすばらしい来客の署名のある巻物は同志社の宝物である。三冊のゲストブックと二本の長

い巻物があり、巻物は片面が名前で埋め尽くされ、さらに裏の半分あたりまで及んでいる。しかも「おそらくあの家を通り過ぎたゲストの半分の名前も彼女の記録には現われていないだろう」とされる。こうした記述を見れば、本稿が『同志社女学校期報』で拾った来校者がなお限られたものであることを知る。それでもデントンの存在が大きかったことはリストからもうかがうことが出来る。

大正一三（一九二四）年一二月の貞明皇后の女学校行啓は、世の同志社観の一転機となる象徴であった。時の総長海老名弾正は行啓を高く評価した。「同志社女学校に行啓になりたるは、女学校の為のみならず全同志社にとりて、如何ばかりの幸福であつたかわからない。同志社は創立以来基督教主義を標榜して来たから種々の障害物が横たわつてをった。永い間政府当局も之を邪魔物と思ひ、国民多数もこれを嫌悪してをった。従つて同志社の発展が捗々しく運ばなかつたのである」。しかし「国母陛下は御自ら行啓遊ばされて因襲の僻見を綺麗にとり去り給うた」と。普通学部山中百、専門学部中桐道太郎も同様の見解を敷衍している。⁽¹⁷⁾

反面、海老名は同志社の現況について「我々は、学生生徒の増加とともに、基督教の色彩が寧ろ稀薄となつていたかと思ひ、自ら戒め、自ら恥じ、恐縮した位である。我々は今後基督教精神の鼓吹に一層努力すべき事を感じずしてはをられない」。此際 国母陛下の行啓が我々にとって多大の奨励となつた事は、感謝して措く能はざる所である」と結んでいる。

松田道校長は行啓の始終を語つて、最後に「願はくは天よ。この有意義の体験を永遠に効果あらしめよ。願くは吾校一千三百有余の学生をして永遠に天佑の豊かなるを知らしめ、しかして誠忠神に国家に奉仕するの途を知らしめ給へ」と結んでいる。⁽¹⁹⁾

大正末期が明治以来の同志社の歴史の一転換期であつたことを象徴する行啓であつた。

『同志社女学校期報』に戻してみると、第一号（明治二十七年）～第一〇号（明治三十一年）の平均ページ数は二五・九ページであった。第二一号（明治三七年）～第三〇号（明治四四年）には五六・七ページと倍増し、第四一号（大正六年）～第五〇号（大正一四年）では百ページを越す。さらに昭和に入ると第五一号（大正一四年）～第六〇号（昭和九年）に平均二八五・六ページと増ページ化が進んだ。しかるにページ数の少なかった明治期ほどには来校者を記録しなくなっている。さらにはほとんど意識されなくなったと言ってもよい。来校者との絆を明治大正期ほどに意識しないで営むことの出来る学園になつていたので物語るのだろうか。

註

- (1) 『同志社百年史・資料編一』一九七六年、同志社。四六ページ。
- (2) 内務卿大久保利通宛「外国人傭入一件」京都府知事榎村正直代理、京都府大書記官国重正文より。同書、六一―六二ページ。
- (3) 「外国人傭入一件（明治十三年）簿書掛」、同書、六〇―六一ページ。
- (4) 「学務課上申」（明治一〇年九月一九日）、同書、三一―二ページ。
- (5) 同書、三一―二ページ。
- (6) 同書、一二四―一二五ページ。
- (7) 「同志社女学校規則摘要」、同書、三三七―三三九ページ。
- (8) I・L・バード、楠家重敏、橋本かほる、宮崎路子訳『バード日本紀行』二〇〇二年、雄松堂出版、一八二―一八九、一九一―一九五ページ。イザベラ・バード、時岡敬文訳『イザベラ・バードの日本紀行（下）』二〇〇八年、講談社、二七四、二七六―二八六ページ。
- (9) 『同志社百年史・資料編二』一〇七四―一〇七六ページ。
- (10) 『同志社百年史・通史編二』七七一―七八〇ページ。

- (11) 同志社社史史料センター「第三十二回 Mesime Room 企画展『大正デモクラシー期の同志社―原田助総長と海老名弾正総長の時代―』資料編」『同志社談叢』第二八号、二〇〇八年三月。
- (12) 『同志社女学校期報』第三七号、大正六年六月。
- (13) 『同志社百年史・資料編二』一〇一八ページ。
- (14) この前年八月二日ドイツは永世中立国ベルギーに領土通過を要求。それはドイツの先ずベルギーを通過してフランスを倒したうえ反転してロシアを破るという二正面作戦（シユリーフェン作戦）による。ドイツ軍は四日に侵攻を開始、ベルギーはリエージュの戦い（六日～一六日）で頑強に抵抗し、ドイツ軍のフランス戦線への到達を遅れさせた。ドイツ軍制圧下のベルギーの窮状に対する同情慈善音楽会。
- (15) 第一回（大正三年一月二三日）神戸女学院。第二回（大正五年二月九日）同志社女学校。第三回（大正六年五月一九日）梅花女学校。第四回（大正六年一月二一日）神戸女学院。
- (16) F・B・クラップ、坂本清音他訳『ミス・デントン―「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年―』二〇〇七年、同志社女子大学・同志社同窓会。一三五ページ。同書の「7. ホステス ミス・デントン」「8. デントン・ハウスの住人たち」（二二九―一七八ページ）の章には内外の主要なゲストの氏名が挙げられている。一九三九年一月四日米国大使J・C・グルーが訪問した時、デントンは熱心に日米親善を説き、尽力を依頼したという（三九三ページ）。日本の秘密情報部がグルーが旅行日程に載っていない京都に立ち寄ったのを問うた時、彼は「無論できないよ、ミス・デントンに訪問せずには京都を通過するなんてことは」と応じたという（二六六ページ）。
- (17) 海老名弾正「皇后陛下行啓について」『行啓記念号、期報第五十号』大正十四年紀元節発兌、同志社女学校学友会・同窓会。
- (18) 山中百謹述「国母陛下御台臨に就て」。中桐道太郎「感激」『行啓記念号、期報第五十号』
- (19) 松田道謹書「国母陛下の行啓を仰ぎ奉って」『行啓記念号、期報第五十号』